

戯曲『ウールバンガ・Ūrbhaṅga(打ち砕かれた太股)』とその周辺

野 部 了 衆

**Bhāsa's Sanskrit Drama, Ūrbhaṅga (the Broken Thighs)
and some of Its Controversies**

Ryouju NOBE

Summary

This paper has attempted a study of Bhāsa's works of Indian Sanskrit Literature. Ūrbhaṅga, a short drama of one act, regarding an incident from the story of Mahābhārata, contains some very interesting elements for us. This study attempts to comprehend the culture of the time, e.g. spiritual problems, through this drama. A Japanese translation of the drama and related articles has been prepared and discussed.

Received Oct. 31, 2000

Key words : Sanskrit Drama, Ūrbhaṅga, Duryodhana, Bhāsa,
Mahābhārata

はじめに

『ウールバンガ (Ūrbhaṅga・打ち砕かれた太股)』は『カルナバーラ (Karnaḥara・カルナの苦勞)』と同様に、1909年にガナパティシャストリ(Ganapati Śasti)によってTravancoreで発見されたサンスクリット戯曲作品の古写本をバーサ(Bhāsa)の作と推定して出版されたTrivandrum サンスクリット叢書に所収の一幕もの戯曲、五篇のうちの一つであり、この作品には高い評価が与えられている。ヴィンテルニッツ (M. Winternitz) は『インド文学史 (Geschichteder indischen Litteratur, dritter Band, Prag 1922)』の中で、この作品についてバーサの名声に値する詩の創作であり、言葉に大きな力と美とがあるのみならず、資料の戯曲化がきわめて芸術的に処理されている⁽¹⁾と述べている。

この戯曲『ウールヴァンガ』は大叙事詩『マハーバーラタ』における記事に題材を求めて作られた作品であり、自軍の殲滅の中、クル族(Kaurava)の王ドゥーリョーダナ(Duryodhana)がパンドゥ族 (Pāndava)、王子の一人、ビーマ (Bhīma) との棍棒対決の顛末記を処理する一幕ものの戯曲である。

プサルカル(A. D. Pusalkar)は戯曲の形式から云えばこの作品はヴィヤヨーガ(Viyayoga)に類別されるが、ヴィンテルニッツ、ガナパティシャストリらはウートスリースティカーンカ(Utsrṣṭikanka)形式の特徴の全てが、この戯曲の中に見出すことができると指摘している⁽²⁾と述べている。この形式は一幕もので、その中でカルナ(karuṇa・同情)のラサ(rasa・情調)が重要であり、主人公は一般的な人物であり、婦女の悲嘆で満たされ、話の筋はよく知られた物語で、創作によって拡張されたものである。

なお、プサルカルが指摘する⁽³⁾ように大叙事詩『マハーバーラタ』の物語の運びと戯曲『ウールバンガ』の場合を比較して見ると、若干の相違を確認できる。①作者バーサによって登場人物ドゥーリョーダナの性格に相当の変更が試みられている。②また、大叙事詩では彼とビーマの棍棒による対決の場所はクルークシェートラ(Kurukṣetra)であり、両太股を打ち砕かれたドゥーリョーダナは、その大地に横倒たわっており、息子ドゥールジャヤ(Durjaya)、両妃パウラヴィー(Pauravī)とマーラヴィー(Mālavi)、両親ドゥリタラーシュトラ(Dhṛtarāṣṭra)とガンダーリー(Gāndhārī)らは叙事詩ではハースティナープラ(Hastināpura)付近に滞在していたと考えられるが。しかし、この戯曲では息子ドゥールジャヤの先導で彼ら一行がドゥーリョーダナを捜し尋ねて来ている。③大叙事詩ではドゥーリョーダナとビーマの棍棒戦の場所にバララーマ(Balarāma)は最初から同席して居らず、④アルジュナ(Arjuna)がビーマに秘密の信号、自分の太股を打撲しており、戯曲のようにクリシュナによって発信されていない。⑤ドゥールジャヤの戴冠即位の話も戯曲のみに見られるものである。本稿では作者によるこれらの改変追加の意図について若干の考察を進めてみたい。

戯曲『ウールバンガ』の題材は大叙事詩『マハーバーラタ』によるものである。それ故、この作品が産み出された背景を知ることが無駄な労作ではないだろう。以下、考察を進めるにあたって、作品に何らかの関わりを伺わせるような伏線が想定される部分を大叙事詩が収拾していくことにする。

【A】クルの二つの家系

バラタ(Bharata)国はかつてクル家のシャーンタヌ(Śantanu)と云う王が統治していた。彼は人間の姿をしたガンガー(Gaṅgā)女神と結婚して息子ビーシュマを得ており、彼を王位継承者とすることが定められていた。彼は武芸の諸徳を悉く備えており、立派な勇者となったある日、シャーンタヌは漁師の娘サーティヤヴァティー(Satyavati)を見初め、恋に陥り、結婚を申し込む。しかし、彼女の父親は自分の娘から生まれた息子を王位継承者にすると云う条件を持ち出す。彼女への未練はあったが、彼はこの条件に同意しなかった。間もなくビーシュマは父の様子に気がつき、その原因を突き止めると自ら漁師の主を訪ねて彼の娘と自分の父親との結婚の実現を求めた。ビーシュマは王位に対する権利を放棄したのみならず、自らの独身の誓いを立てた。ここに彼らの結婚が適い、彼女から二人の息子チートラー

ンガダ(Citrāṅgada)(Ādiparva, chap. 101, verse 2)とヴィチートラヴィーリヤ(Vicitra-vīrya) (ibid. verse 3) が生まれた。やがて、シャーンタヌは没し、チートランガダは戦争でガンダールヴァ(gandharva)に殺害されたとき、家族の年長者としてビーシュマはヴィチートラヴィーリヤを王位に就けた。その彼は二人の妻を娶ったが息子を儲けることなく死んでしまった。彼の母親サーティヤヴァティーは家系の断絶を恐れて、レヴィラト(revirato)の古い慣例にもと付いて(マヌ法典第9章「ニヨーガ」の項、Manusmṛti IX. 57参照)ビーシュマにヴィチートラヴィーリヤの残した寡婦と結ばれて息子を儲けることを願った。しかし、ビーシュマは独身の誓いを立てていたことを明らかにし、その誓いを破らないことを宣言した。そのとき、サーティヤヴァティーは自分の庶子ヴィヤーサ(Vyāsa)のことを思い起こした。彼は彼女と聖者パラージャラ(Parāśara)との間に生まれた人物であり、ヴィチートラヴィーリヤの異父兄弟である。彼女は、ビーシュマの同意を得て家系の存続のために、ヴィヤーサに要請する。苦行者の姿のヴィヤーサが第一妃アーンビカー(Ambikā)に接近したとき、彼女は驚いて目を閉じた。そして生まれた息子ドウリタラーシュトラは生来盲目であった(ibid. chap. 106, verse 10)。また、彼が第二妃アーンバーリカー(Ambālikā)に接近したとき、彼女は蒼白になった。そして生まれた息子は顔面蒼白であり、パーンドゥと呼ばれた(ibid. verse 18)。すなわち、ドウリタラーシュトラとパーンドゥは異母兄弟である。ドウリタラーシュトラは盲目であったため、彼の弟パーンウに王位を継承させた。

1) パーンドゥの五人の息子

パーンドゥは二人の妃を娶った⁽⁴⁾。一人はヤーダヴァ(Yādava)王の娘プリター(Prthā)別称クーンティー(Kuntī)であり、もう一人はマドラ王シャーリヤ(Śalya)の妹マードリー(Madri)である。

パーンドゥは森に狩猟に出かけたとき、鹿を見つけた(Ādiparva, chap. 118, verse 5)。平安を愛するゆえに、妻と共に鹿の姿に変身して森の生活を楽しんでいた聖者キンダマ(Kindama)らに矢を放った(ibid. verse 6)。彼らは交尾の最中であつた。彼が息を引き取るまでの会話はつぎのようである。徳高い王家の生まれであるお前が、このような状態にある我々を殺害しようとした。個人的判断は法を侵害してはならない。法は個人を超越してあるものだ。それと同様に、自然界の摂理にしたがって、交尾している動物を矢で射るなど論外である(ibid. verse 9~11)、と。パーンドゥも云う。王族であるクシャトリアにとって、鹿を射るのは敵を倒すと同様のことだ。何ゆえその行為が咎められねばならないのだ(ibid. verse 12)、と。聖者は云う。その行為が完了するまで、何ゆえ待てなかつたのだ(ibid. verse 18)。クシャトリアの務めは罪を犯す者、残酷な行為者、宗教の教えに背く者を処罰することであり(ibid. verse 24)、私がお前に一体何を致したと云うのだ(ibid. verse 25)。私がバラモンとは知らずに仕出かしたことから、バラモン殺しの罪は問わない(ibid. verse 29)。しかし、お前の残忍な仕打ちは同じようにお前に返って来る(ibid. verse 26)。お前の愛する婦女と交わろうとする

ときに、お前と交わった妻も同様の運命を辿るのだ (ibid. verse 31)、と深い悲しみのうちに息を引き取った。

このことがあってからパーンドゥは物思いに沈んでいたが、ある日二人の妃クーンティーとマードリーに打ち明ける。すなわち、父親は過淫が原因で若死にし、自分は聖仙ヴィヤーサの恩恵で生まれた。にもかかわらず、罪もない鹿を追い回して大過失を犯してしまった。それ故、愛欲を断ち、すべての世俗の生活を放棄し、苦行者になってひとり森をさ迷う生活をしようと思う。感情に左右されない、ひとの恩恵や贈物をうけとることなく、すべての生類を傷つけることなく、平等に接し、食は日に数軒の施しのみで済ませる、仮に、それで不足の場合でも先に訪問したところには二度と立たないで、ひもじさに耐えよう。そして、この世のすべての罪過から清められ風のように自由に生きて行きたい、と。両妃は夫君と共に苦行の道に入り生死を共にすることを誓い合い、この願いが受容れられない場合には死ぬことを彼に表明した。彼はその願いを受容れ、身につけていた衣服とすべての宝石、妃の装身具をバラモンたちに手渡して云う。これを都城に持ちかえり、今日からパーンドゥはき先と共にこの世を捨て森に入ったと告げよ、と。彼ら従者らはハスティナープラへ帰り、ドゥリタラーシュトラに告げた。パーンドゥはヒマラーヤの山を渉猟しガンダマーダナの奥深くに至り、苦行の道に励む。彼の悩みは、子を儲ける力を奪われていることであった。子を儲けなければ先祖への債務を返済できないことを、彼はクーンティーに打ち明ける。彼女は若き日の出来事を思い出す。ボージャ国王の王女であったころ、来客聖仙ドゥールヴァーサス(Durvāsas)の接待の返礼に授かった授記、思念した相手の子を産むことができるということについてパーンドゥに話した。そのことを、彼はおおいに喜んだ。そして、彼の願いに沿って、三人の息子、ダルマ(Dharma)との間の子ユードティーシュティラ(Yudhiṣṭhira)、インドラ(Indra)との間にアルジュナ(Arjuna)、そして、ドゥーリョーダナが産まれた同じ日にヴァーユ(Vāyu)との間にビーマ(Bhīma)を産んだ。他方、シャーリヤの妹マードリーは夫君を通して、クーンティーに力を分け与えてくれるように依頼する (ibid. chap. 124, verse 9~10)。快諾を得た彼女は双子神アーシュヴィン(Aśvin)を念じてナクラ(Nakula)とサハデーヴァ(Sahadeva)を儲けた (ibid. verse 16 & 17)。優れた資質を所有する五人の息子に恵まれたパーンドゥは喜びに充たされ以前のたくましい力を取り戻していた (ibid. chap. 125, verse 1)。ある春の日、森に家族ともども出かけたとき、甘い香りが漂い、蜜蜂が飛び交う、動物も植物も春爛漫の精気に溢れていた。夫君の禁欲に細心の注意を払い、同行している両妃であったが、何時の間にかマードリーとパーンドゥの二人になっていた。彼の欲情は全てを圧倒して彼女を抱き寄せた (ibid. verse 10 & 11)。そのとき、バラモンの怒りの呪詛に触れて彼は急死する (ibid. verse 11~12)。パーンドゥの第二妃マードリーは自らの意志で彼と共に殉死者として焚かれた (ibid. verse 33)。

その後、ドゥリタラーシュトラが国政を執ることとなった。パーンドゥの五人の息子は

クーンティーと共にハースティナーブラに住む父親の兄、ドゥリタラーシュトラの宮殿へ連れられ、そこで彼の息子らと共に養育される (ibid. chap 128 verse 14)。ドゥリタラーシュトラは子どもの遊戯においてさえ、悉くパンドウの五人の息子らがドゥーリョーダナをはじめとする自分の息子らを凌いでいることに羨望の想いを抱いた。殊に大きな身体のビーマの傲慢と法外の力の披瀝は、彼の息子らには不快なことであり、ドゥーリョーダナのビーマへの憎しみは甚だしかった (ibid. verse 25)。武器の使用法に巧みで、著名なバラモン、クリパ(Kṛpa)(ibid. chap. 130, verse 22~23)とドゥローナ(Droṇa)(ibid. chap. 134, verse 2)の二人が武芸の教師として招聘された。彼らの門弟にはドゥリタラーシュトラとパンドウの息子らの他に、ドゥローナの一人息子アーシュヴァーッターマン、スータ (sūta 御者) の息子カルナらがいた。ドゥーリョーダナとビーマは棍棒術、アーシュヴァーッターマンは呪術、ナクラとサハデーヴァは剣術、ユデーシユティラは戦車戦術で各々その術の最高の学生となった。アルジュナは最も熟達した弓術者としてのみならず、全てにおいて他を凌駕していた。このためドゥリタラーシュトラの息子らは彼を嫉妬した。

彼らの教育期間の満了に際して、ドゥローナはビーシュマ、クリパ、ヴィドゥラ (Vidura) らの面前で彼らの修得した技術披露のための競技会を催すことになった。諸王、王妃らをはじめとする大集会でドゥーリョーダナとビーマは互いに憎悪を抱く激烈な棍棒戦を展開し、真に迫る戦いぶりは仲裁を要するほどであった。アルジュナは弓術の妙技で観衆の喝采を博した。そのとき、カルナが競技場に現れて、アルジュナの弓術を再現した。カルナの出現に彼は立腹したが、ドゥーリョーダナは彼を歓迎し、永遠の友情を誓った (ibid. chap. 138, verse 40 & 41)。まさに、アルジュナとカルナの一騎打ちが開始されようとしたとき、クリパは云う (ibid. verse 31 & 32)。戦士は身分を明かして戦うものだ。身分違いの間では一騎打ちは成立しない (ibid. verse 33)、と。カルナはビーマらの辛辣な嘲笑と屈辱的な罵声を浴びせられた (ibid. chap. 139, verse 6 & 7)。この御者の息子として養育されたカルナは、パンドウと結婚する以前にクーンティーが密かに産み落としたスーリヤ (Sūrya 太陽神) との間に生まれた男児であり、幼すぎて母親としての喜びに目覚めていなかった彼女が恥ずかしさに気を取られて、木箱 (籠) に入れてアシュヴァー河へ流した嬰兒の成長した凜々しい若者なのである (Vana parva. chap. 307, 7)。それゆえ、彼はパンドウの五人の息子と異父兄弟と云うことになる。クーンティーは甲冑と耳飾を着け、太陽の輝きに包まれたこの若者は自分が生んだ男児であることに気付く。ヴィドゥラは自分の神通力でそのことを知っている人物である。しかし、彼はこの事実を他言しない。

この辺りの事情を戯曲化して『カルナバーラ』⁽⁵⁾と題したバーサの作品がある。

2) ドゥーリョーダナと百人の兄弟

盲目で生まれたドゥリタラーシュトラはガンダーラー国王スバラ (Subala) の娘ガンダーリーと結婚した。彼には百人の息子とひとりの娘、そして他にヴァーシャ階級の女と

の間に生まれたもう一人の息子がいた。その経緯を『マハーバーラタ』は次のように伝える (Ādi parva, chap. 115)。すなわち、

あるとき、ヴィヤーサは空腹と渇きで疲れきって彼らの宮殿へ到着した。そのとき、ガンダーリーは手厚くもてなし、彼に喜ばれた。彼は感謝のしるしとして夫君に劣らぬ百人の息子を授かるという祝福を彼女に与えた。彼女は妊娠したが、二年経過しても出産しなかった。夫君の弟、パンドゥ (Pāndu) の妻クーンティーが素晴らしい男児を出産したことを聞き、口惜しさと悲嘆に襲われたガンダーリーは自分の腹部をカ一杯殴りつけた (ibid. verse 15)。胎内から堅い肉塊が転げ出た (ibid. verse 16)。そのことを感知したヴィヤーサは、直ちにそこへ遣って来て、事の次第を問い質した。彼は自分の授けた祝福が確かであることを述べて、彼女を慰め、百個の壺を用意させ、それにギー (ghī・乳酪) を満たした。人目に触れない場所で肉塊に水を振りかけると、それは親指ほどの大きさに百個に分裂した (ibid. verse 19, 20)。彼はその肉塊を一つずつそれぞれの壺に配分し、大事に保護して二年後に蓋を開けること (ibid. 22) を彼女に言い残してヒマラーヤへ去って行った (ibid. verse 23)。時間が満ち、最初にドゥーリョーダナが壺の中から生まれ出た (ibid. verse 24)。

【B】ユーディーシュティラの王位継承の問題とドゥーリョーダナと彼の兄弟らの陰謀

自分の長子誕生が適うたことから、ドゥリタラーシュトラは先に誕生した実弟パンドゥとクーンティーの間に生まれたユーディーシュティラと自分の長子の間における王位継承の問題についてビーシュマ、ヴィドゥラらに相談した。何故なら、彼の長子ドゥーリョーダナが不吉な凶兆を伴って誕生したからだ。彼はロバのような唸り声を上げ、恐ろしい声で咆え、狼や秃鷹らが一斉に鳴き騒ぎ、強風が巻き起こり、あちこちで放火や火事が発生した (ibid. verse 27)。結果は明白であった。先に生まれたユーディーシュティラが継承者に相応しく、彼の生来の徳性は王に相応しく、彼ならば誰一人不満はないと云うのだ (ibid. verse 28, 29)。自分の長子に愛着を抱くドゥリタラーシュトラは、ユーディーシュティラの後、自分の息子が王位に就けるかどうかについて問い質した (ibid. verse 30)。ヴィドゥラをはじめバラモンらは忠告する。不吉な凶兆を伴って生まれたものは一族滅亡の本源になるゆえ、こころを鬼にして彼を放棄すべきである。それがクルー族のためになり、彼を犠牲にしても未だ九拾九人の息子がいるではないか、と。我が子への可愛さ、未練はこの忠告に耳を貸さなかった (ibid. verse 37)。そして一ヶ月の間に九拾九人の息子と一人の娘が誕生した (ibid. chap. 116, verse 2)。この娘の誕生についてはヴィヤーサが百個の壺に水を振りかける仕事をしていたとき、ガンダーリーが娘を授かるように心中で祈願していることを感知して、その願いを適えるためにもう一つの壺を用意させて誕生させている。彼女はドゥーシャラー (Dusśāla) と云い (ibid. verse 5)、のちにシンドゥの王ジャヤードラタ (Jayadratha) に嫁いだ。彼は大戦でアルジュナによって殺害されている (Droṇa parva, chap. 146, verse 104~130)。また、ドゥリ

タラーシュトラには、ガーンダーリーの妊娠している間、自分の身の回りの世話をしていたヴァーシャ階級の女性との間にユユーツ (Yuyutsu)、別称カラナ (Karaṇa) とともに云うも一人の非常に聡明、公正な心の所有者である息子がいる (Ādi parva, chap. 115, verse 40)。

【C】ユーディーシュティラの王位継承とドゥーリョーダナ兄弟らの陰謀

一年の後、ドゥリタラーシュトラは、勇気の面でもその他の諸資質でも勝れているユーディーシュティラをクル家の長子とみなして王位継承者と定めた。彼を除いたパーンドウの四人の息子らは武芸に一層の精進をし、各自の腕力で勝利を獲得するような遠征を企てた。パーンドウの息子らの武勲を聞き知ったドゥリタラーシュトラは自分の子孫の将来に一抹の不安を隠し得ない。彼の長子ドゥーリョーダナは大叙事詩の物語において大変な悪漢として処理されている人物の一人である。そのとき、ガーンダーリーの兄であるシャクニ (Śakuni)、ドゥーリョーダナと弟・ドゥーシャーサナ (Dusśāsana)、親友であるカルナらは、パーンドウの五人の息子を殲滅することを画策していた (Ādi parva chap. 143, verse 1)。陰謀に父王から支持を得た。彼らはヴァーラーナーヴァタ (Vāranāvata) に宮殿を新築してパーンドウ五人の息子をそこに居住させる。しかし、ドゥーリョーダナは巧妙な建築士を雇い入れて、この宮殿を密かに可燃性の蠟樹脂材で建造させていた。その意図はパーンドウ一族を焼死させることにあった。だが、この計画はドゥリタラーシュトラの異母兄弟ヴィドゥラによってムレーツチャ (Mleccha) 語でユーディーシュティラに知らされていた。パーンドウの一族はその宮殿に移り住む。そして、自ら火を放ち、密かに掘らせてあった地下道を通り抜け、彼らは森へ難を逃れる。

【D】戯曲『ウールバンガ』の前談

あ) 大戦第十七日クル軍完敗、老将クリパはクル王に対して降伏の説得をする

クルークシェートラ (Kurukṣetra) での大戦第十七日、ドゥーリョーダナの率いるクル軍は絶望的な反撃を試みたが、完膚なきまでに打ちのめされた。老将クリパが怒りを込めてドゥーリョーダナに対して、パーンドウ軍への降伏の説得を試みる。まず、私の言葉に耳を傾け、その後ご随意にするがいい (Śalya parva, chap. 4, verse 1~7)。我々には戦う他に道はない (ibid. verse 8)。一族もろともに戦って死滅するのがクシャトリヤの本望であり (ibid. verse 9)、敵に背を見せることは大罪なのだ。それゆえクシャトリヤの道は厳しいものだ (ibid. verse 10)。ビーシュマ、ドゥローナ、カルナ、ジャヤードラータ (シンドウ王、ドゥーリョーダナの妹の夫君)、貴方の兄弟ら、息子のラクシュマナらまでが殺害された。我々が頼みとして来た方々は己の身を犠牲にして全てあの世へ行ってしまった (ibid. verse 11 & 12)。彼らが健在であったときですら、クリシュナに率いられたアルジュナを倒し得なかった。今日の戦いで多くの武將を失ってしまった我が軍に、アルジュナを倒せるものが何処に居ると云うのだ。

……かつてビーマが大広間で宣言した言葉は殆ど彼が云った通りに遂行されている (ibid. verse 38)。理由もなく貴方がパードウの五人の息子に犯した数々の罪の報いは現実のものとなって現れている (ibid. verse 40)。いまこそ己を制御するときだ。弱体化した者は話し合いにより和平を求めるべきなのだ。栄えている者は戦いを起こすものだ。それが聖仙の説示した政治だ (ibid. verse 43)。力量で劣勢になってしまったゆえ、パードウの五人の息子と和平を結ぶことが得策だと私は考える (ibid. verse 44)。何が自分にとって良いことかを知らず、あるいは知っていてもそれを無視するものは速やかに己の王国を失い、如何なる利益も得られない (ibid. verse 45)。ユーディーシュティラに降伏しても我々の王国は確保される可能性がある。それは我々にとって何よりも大切なことであり、パードウの五人の息子に敗北して味わう苦痛よりよほどましなことである (ibid. verse 46)。彼は情け深い男である。ドゥリタラーシュトラとクリシュナの要請があれば彼は貴方を王として認める (ibid. verse 47)。クリシュナがユーディーシュティラに何を云おうとも、アルジュナ、ビーマらは皆彼の言葉に従うだろう (ibid. verse 48)。クリシュナはクル族の王ドゥリタラーシュトラの言葉を見無視できず、パードウの五人の息子はクリシュナの意見を無視できないだろう (ibid. verse 49)。彼らへの敵意を捨てることが貴方のためなのだ。私は卑しい動機や命を惜しむがゆえに云うのではない。貴方に良かれと思って云っている。もしもそれを無視すれば、貴方は死の間際に私の言葉を必ず思い起こすだろう (ibid. verse 50 & 51)、と。

い) ドゥーリョーダナ自身のクリパの和平論への見解とクル軍の現状分析

これに対して、ドゥーリョーダナは、荒い息を吐き、沈黙して暫く思案して後、つぎのように述べる。貴方は友として云うべきことを私に語った。貴方は私のために身の危険を顧みず全力で戦ってくれた (ibid. chap. 5, verse 3)。しかし、貴方の言葉は死に瀕している人を心地よくさせない薬のように、私を歓ばせないのだ (ibid. verse 5)。有益で理性に富んだ言葉は受け入れ難いのだ (ibid. verse 6)。我々に王国を奪われた彼らパードウらが、今更私を信用するだろうか (ibid. verse 7)？ いかさま賭博で負かされたユーディーシュティラがもう一度私の言葉を信じるはずがない。使者として遣って来たクリシュナを我々は欺いた。我々の施策は実に卑怯だったし、私の言葉を彼が信じるだろうか (ibid. verse 8)？ あの広間に引きずり出され、哀れな姿で泣いていた【彼ら五兄弟の共有妃】ドラウパディーへの我々の仕打ち、さらにパードウの五人の息子らの王国を収奪した我々の所業をクリシュナは決して忘れてはいないだろうし (ibid. verse 9)、ドラウパディー、アルジュナ、ビーマ、ナクラ、サハデーヴァ、ドゥリーシュターデユムナ、シーカーンディンらは我々への復讐の炎を消すことはないだろう (ibid. verse 15)。アビマーニュの非業の最後への恨みからも彼らはきっと和平に応じるまい (ibid. verse 20)。大海に囲まれた地上の覇者であるこの私が、パードウの五人の息子の温情に縋って己の王国を楽しんでおられますか (ibid. verse 21)？ 諸国の王の上に日輪のように君臨していた私が奴隷のようにユーディーシュティラの後に追隨

して歩けるだろうか (ibid. verse 22) ? 貴方の語った穏やかで良識ある言葉を認めない訳ではない。私はいまが和平の時期だと思わない (ibid. verse 24)。いまは、正当な戦いは正しい政策だと私は思うし、むしろ反対に戦うべき時期なのだ (ibid. verse 25)。私は沢山の供犠を開催して来た。バラモンに惜しみなく供物を捧げ、欲することを全て達成してきた。ヴェーダの吟唱にも常に傾聴したし、究明もして来た (ibid. verse 26)。私はパーンドウらに、そのような遜ったものの云い方は決してしない (ibid. verse 27)。私は諸国を平定し、王国を統治して来た。私は贅沢をも堪能し、宗教、利益、欲望も共に求めて来た。先祖の供養、クシャトリヤの義務を確実に果たした (ibid. verse 28)。確かに、この世に幸福は存在しない。王国、名声が何だと云うのだ。名声はこの場でのみ掴み取るものだし、名誉は戦いによってのみ勝ち取るものであり、それ以外に道はない (ibid. verse 29)。寝床で死を迎えるなどクシャトリヤにとっては恥でしかない (ibid. verse 30)。供犠を果たした後、森か戦場で死を迎えてこそ栄光に包まれるものだ (ibid. verse 31)。……最高の境地に到達した人々と共に正義の戦いを遂行することでシャクラ (インドラ) の地へ向かおう (ibid. verse 33)。その地こそ敵に背を見せず、賢明にして、真実を重んじた、供犠を果たした敬虔な勇士の住処なのだ (ibid. verse 34)。……我々は、いまや天界人の歩んだ道、一步も退かず倒れた勇士ら、敬うべき父祖、賢人、ジャヤードラータ、カルナ、ドウシャーサナらの歩んだ道を昇って行くだろう (ibid. verse 36 & 37)。戦場で雄雄しく戦い傷つき倒れて行った数多の王、勇士らの天国への道は益々込み合い辿り着くのが困難になるだろう (ibid. verse 40) が、自らの王国のことを差し置いて私のために命を捨ててくれた勇士らに感謝し、その借りの返済をしたいのだ (ibid. verse 41)。自分一人助かったとき、人々の非難は私に集中するだろう (ibid. verse 42)。一族、友人、支持者を失って一人王国を得たところで何になろう。世界の覇者であった私には堂々と戦って天国へ行くのみ、他に道はない (ibid. verse 44)、と、このように述べる。ドゥーリョーダナには最早、これまでの世評のような傍若無人さは伺い得ない。彼の言葉にそこに居合わせたクシャトリヤらは口々に賛同の意を表し (ibid. Śalya parva, chap. 5, verse 45)、敗北の傷心を振り捨てて出陣の準備に取り掛かった (ibid. verse 46)。その夜、彼らは戦場から2 ヨージアナ (約2.5キロメートル) の処に留まり (ibid. verse 47)、そこにはヒマーラヤの麓を流れる美しい赤い水のサラースヴァティー河があり、その水で身体を洗い、渴きを癒して明日の戦いに備えた (ibid. verse 48)。

う) カルナ亡き後、シャーリヤを総指揮官に選任

ドゥーリョーダナはアーシュヴァータマンに会い、クリシュナに守られたアルジュナに殺害された自軍の総指揮官カルナ亡き後の人選に関して彼に意見を求め、彼の進言 (ibid. chap. 6, verse 19) でマドラスの王シャーリヤを総指揮官に選任した (ibid. verse 22)。クル軍の雄叫びはユーディーシュティラの耳にも届いた (ibid. chap. 7, verse 22)。彼はその大歓声の意味が何であるか、すぐに見当がついた (ibid. verse 23)。

え) シャーリヤに対するパンドウ軍の戦略

彼はクリシュナに問う。シャーリヤの実力はドウローナ、ビーシュマ、カルナと同等かもしくはそれ以上であり (ibid. verse 27)、シーカーンディン、アルジュナ、ビーマ、サートヤキ、ドゥリシュタードユムナを凌ぐ戦闘能力を所有しているとの評価である (ibid. verse. 29)。そこで彼はシャーリヤへの戦略を如何に立てるべきかをクリシュナに問う。シャーリヤが本気で、心底怒りに燃え上がったときには、その災厄は恐るべきものとなり (ibid. verse 26)、彼と対抗できるのは貴方しか居ない (ibid. verse 31)。たとい伯父であっても情けは無用、彼を倒せ (ibid. verse 36)。貴方はクシャトリヤの儀軌を理解してマドラスの王を屠れ (ibid. verse 33)。貴方の念力、総力挙げてかの戦車の勇士を倒すのだ (ibid. verse 38) と、クリシュナは述べて自分の天幕へ帰った (ibid. verse 39)。パンドウ軍はカルナを倒したことに満足して眠りに就いた (ibid. verse 42)。

お) クルークシェートラの大戦第十八日総指揮官シャーリヤの戦死

大戦の第十八日目が始まった。クル軍はシャーリヤの得意とするヴィユーハの布陣で対戦した。戦闘は激烈を極めた。クリパ、アーシュヴァータマン、シャクニ、クリタヴァールマン、ドゥーリョーダナとその若干の兄弟らを擁してシャーリヤは結合攻撃体制でパンドウ軍に立ち向かう。両軍には忽ち甚大な損失が生じた。ユーディーシュティラとシャーリヤの間の戦いは当に決闘の様相を呈した。この辺りの状況はシャーリヤパールヴァン第六章から第十七章にわたって叙述されている。想像を絶する程に強力な戦力、戦術、戦闘能力と戦意を所有するシャーリヤに苦戦する彼を援助するために棍棒を手にしてビーマが接近する (ibid. chap. 11, verse 48)。ビーマの一撃がシャーリヤの御者の胸を襲った (ibid. verse 59)。シャーリヤは戦車から飛び降り、棍棒を手にとって戦闘を繰り広げた (ibid. chap. 12, verse 1)。この日のビーマの勇気は見違えるものがあり、シャーリヤを苦しめた。ユーディーシュティラは不屈の闘志を漲らせ自分の前に進み出たシャーリヤの広い胸に沢山のマントラ (呪文) を吹き込んだ投げ鍬に渾身の力を込めて放った (ibid. chap. 17, verse 46 & 47)。偉大な総指揮官シャーリヤは大地に抱かれ、死んだ (ibid. verse 54)。

か) クル軍惨敗

倒れた総指揮官を見てクル軍は混乱したが、戦闘は続行され、自軍の先頭に進み出たドゥーリョーダナは敗走する兵士らに告げた。死神は貴方々が臆病であろうと勇敢であろうと何れ貴方々を征服する。我々の諸々の英雄ら全てが行っている天国へ確実に到達するに違いない。何故パンドウ軍を恐れるのか。我々は余命を運に委ねて戦いましょう、と。彼は全力を投入して戦いを展開し、パンドウ軍を寄せ付けなかったが、周囲の自軍の兵士は殆どがビーマに殺害されてしまった。ドゥーリョーダナの拠り所の一人、母ガンダーリーの弟シャクニは象軍の間で息子ウルカと共にユーディーシュティラの異母兄弟サハデーヴァとナクラに遭遇した。ナクラは自らの誓いの通りにウルカを殺害した。息子の死を見知った彼シャクニ

は暫く戦闘を試み、逃走した。サハデーヴァは彼を追跡する。貴方がハースティナープラへ遣って来なかったならばドゥーリョーダナは王子らしい本性を決して失わなかったし、詐欺師にもならなかったのだ。……あのとき、私は貴方を殺害する誓いを立てた。貴方は我々が各自の誓いを立てたとき、嘲笑したけれども、ラードヘーヤ（カルナ）はアルジュナに、ウルカはナクラによって殺害された。ドゥーリョーダナのみが未だに生きているが余命幾ばくもないだろう。我々の誓いを全うするためには貴方の死が必要なのだ。いざ……、と。サハデーヴァは彼に挑む。そして、彼はシャクニに投げ槍を放ち、殺害した。彼の死でドゥーリョーダナの全ての期待は撲滅されてしまった。

この時、パンドウ軍の残存兵力は、戦車二千、象七百、騎馬五千、そして一万の歩兵であった (ibid. chap. 29, verse 21)。これが戦闘開始十八日目の彼らの指揮した七群編成の完全な軍隊の残りであった。これに対してクル軍の十一部門編成の完全な軍隊は、いまや一台の戦車すら所有しない、僅かに、ドゥーリョーダナ、クリパ、アーシュヴァーッタマンとクリタヴァールマンの生存者であった (ibid. verse 33~34)。

き) 棍棒を携えてドゥーリョーダナはドヴァイパヤナ湖中に避難する

／ヴィードウラの忠告が的中する

自軍の壊滅と雄叫びを上げる敵軍を見ながら、ドゥーリョーダナは自分の棍棒を手にとり、湖に逃げ込んだ (ibid. verse 25)。そして、壮絶なクルークシェートラの戦を経験したいま、かつて耳にしていた、貴方はクシャトリヤ全種族の破滅の原因になるだろう、との伯父ヴィードウラの言葉に動揺を否めず、<彼は自分の心眼で全てを見知っていたに違いない>と思った (ibid. verse 26~28)。ドゥーリョーダナの身体は燃え、熱に覆われていた。恐ろしい戦場から可能な限り離れるために歩き続けて、彼は冷たくて静かな湖に到達した。その水で四肢を冷やそうと考えた彼は自分の悲しみと永遠の友である棍棒だけを手にして佇んだ。

く) ドゥーリョーダナをヴァーサに救出されたサーンジャヤが見つかる

その彼を御者のサーンジャヤが見つけた。彼はクル軍が減んだとき、パンドウ軍のサートヤキに捕虜にされた (ibid. verse 35)。しかし、彼の剣で殺害されかけたときヴィヤーサが現れて云う (ibid. verse 37)。王ドゥリタラーシュトラの処へ帰ることを許すべきだ、と。そこでサーンジャヤは彼らから解放された (ibid. verse 38, 43) のである。サーンジャヤは諸王の中の君主であったドゥーリョーダナの現況に接して涙にくれた (ibid. verse 41)。私と父王とを愛する人は貴方だけであり、私のために涙を流す人は貴方一人である、と彼はサーンジャヤを宥め、暫く黙って立っていた。

け) サーンジャヤへのドゥーリョーダナからの家族への伝言

彼はサーンジャヤに父王の処への伝言を依頼する。すなわち、貴方の息子、ドゥーリョーダナは湖に留まり、自分の身体と心の熱気を冷やしたいと思う。大戦はパンドウ軍の勝利に終わり、兄弟と友達ら全てを失ってしまった今、生きている効用は何処にあるのか。私が

生きていく如何なる望みもないことを告げてくれ。私の父への挨拶を彼に運び伝えてくれ。私は彼に再会することはないでしょう。彼に大変な悲しみを引き起こさせたことをご容赦ください。私は彼をこよなく愛しています、と。また母ガングーリーには、今まで誰にも頭を垂れたことのないドゥーリョーダナが彼女の両足のもとへ平伏して許しを乞い求めます。私は再び産まれてくるときは必ず貴女は私の母親でありますように、との伝言を依頼する。そして彼はサーンジャヤに云う。行けよ、私は暫くの間、自分の四肢を冷却しなければならないので、水の中で休息をとる。誰かに発見される前に湖に入らねばならない、と。彼は棍棒を手に持って湖の中に入った。

こ) サーンジャヤとアーシュヴァーッタマン一行との遭遇

帰途についたサーンジャヤは途中でクリタヴァールマンと一緒にクリパとアーシュヴァーッタマンに遭遇した(*ibid.* chap. 29, verse 54, 55)。彼らに主君ドゥーリョーダナの所在を尋ねられたサーンジャヤは王がドヴァイパヤナ湖に居ることを告げて彼らと別れた(*ibid.* verse 57)。他方、パーンドゥ軍の野営地は戦勝の興奮に包まれていたが、彼らはドゥーリョーダナを捜していたが(*ibid.* chap. 30, verse 5)、その所在を確認できず(*ibid.* verse 6)、兵士ともども戦に疲れた馬・象らに休息を取らせるために野営地に引き上げた(*ibid.* verse 8)。

さ) アーシュヴァーッタマン一行とドゥーリョーダナとの対面

そのとき、クリパら一行三人はドヴァイパヤナ湖に静かに接近して王に語りかけた(*ibid.* verse 10~11)。ユーディーシュティラと戦いましょう。勝利して大地を支配するか、それとも仮に戦死したとしても天国へ行けるのだ(*ibid.* verse 11)。彼らの軍も手薄であり(*ibid.* verse 12)、彼らは我々の攻撃に立ち向かい得ないでしょう。我々に護られた貴方は特別なんだ。出て来てください(*ibid.* verse 13)、と。この言葉を聞きとめたドゥーリョーダナは水の中から云う。幸運にも生きている貴方がたに会えました(*ibid.* verse 14)。今の私は疲労困憊しており、身体は夥しい負傷があり、戦うための力を持ち合わせて居らず、いまは戦い得ない(*ibid.* verse 15)。私への貴方がたの信愛もまた素晴らしいが、その威力を示すに相応しい時ではない(*ibid.* verse 16)。この一夜を休息して、明日の朝一緒に敵と戦おう。間違いない(*ibid.* verse 17)と。アーシュヴァーッタマンは云う。出て来てください。戦いましょう(*ibid.* verse 18)。もしも、戦でパーンドゥ軍を殺害することなしに今夜を過ごしたならば、私は全ての敬虔な人々によって楽しまれ、快樂であります諸々の供犠の施行の喜びを楽しまないでしょう(*ibid.* verse 20)。パーンチャーラ軍を殲滅することなしに、私は自分の甲冑を解きません(*ibid.* verse 21)、と。

し) ドゥーリョーダナの所在がパーンドゥ軍に通報される

彼らのこの会話を湖に喉の渇きを癒しに来ていたた狩人らが偶然にも聞いていた(*ibid.* verse 24)。その狩人はビーマのための食用肉を確保するための仕事人であった(*ibid.* verse 21)。

彼らはパンドゥ軍の野営地に急行して、ビーマにことの次第を告げた。(ibid. verse 29~30)。そのドゥーリョーダナの所在の知らせは直ちにユーディーシュティラに届けられた(ibid. verse 31, 39~40)。そして、パンドゥ軍はドヴァイパヤナ湖へ向けて出発し (ibid. verse 50)、到着した (ibid. verse 53)。ユーディーシュティラは五兄弟と共に湖に進み出た (ibid. verse 57)。埃が舞いあがり、パンドゥの息子は戦車の車輪の音や法螺貝の高鳴りで大地を震わせた (ibid. verse 58)。この騒音を耳にしたクリタヴァールマン、クリパ、アーシュヴァーッタマンらはクル王にパンドゥ軍と到来を告げてその場を去った (ibid. verse 59~60)。

す) パンドゥ軍湖岸へ到着、湖面の静寂にユーディーシュティラは苛立つ

湖岸に到着したパンドゥ軍の見た湖面は静寂そのものだった(ibid. chap. 31, verse 2)。ユーディーシュティラは苛立つ。自分の幻術の威力を駆使して、彼はいま、水中に居る。眩惑行為である欺き人はこのように避難している (ibid. verse 4) が、稲妻の所有者が戦いに彼を援助しようとも、おお、マーダヴァよ、今日、殺された彼をご覧になるだろう (ibid. verse 5) と。ユーディーシュティラは彼クル王への積念の怒りで燃えていた。

クリシュナは云う。貴方自身の幻術の威力で、その術の専門家であるドゥーリョーダナのこの幻術を打ち破るのだ。幻術に精通している人は幻術で殺害されるのだ。実に、(ibid. verse 6)。この湖水に貴方の幻術の力を用いて、おお、バラタの主よ、貴方は幻術の達人であるスヨーダナ (ドゥーリョーダナを殺害せよ (ibid. verse 7) と。

せ) ユーディーシュティラと湖水に潜むドゥーリョーダナとの言葉の往来

ユーディーシュティラは湖の縁まで歩み寄り、彼に云う。クシャトリヤを滅ぼし、一族を滅亡させておきながら、なにゆえに水に魔法を懸けたのか (ibid. verse 16)。出て来て我々と戦え (ibid. verse 17)。貴方は誇り高い家系に属するクシャトリヤの一員である。生まれを思い出せ (ibid. verse 20)。クルの家系の生まれが貴方の自慢ではない。恐怖で戦場から遁走してこの湖の深みに (ibid. verse 21) 自分の兄弟、息子、諸王、親族、諸友を犠牲にしておきながら貴方はいまこの湖に生き延びているのか (ibid. verse 23~24)。出て来て戦え。貴方の軍隊や兄弟の全ては殺害されてしまっているのに貴方は生きている。もしも、貴方が誠実な勇士であるならばいま、自分の命だけ助けようなどと考えるな (ibid. verse 27~28)。……クシャトリヤの務めに従い出て来て戦え。戦いで我々を打ち負かし地上の栄光を欲しいままにするも良し、破れて冷たい骸となって地上に横たわるも良し。いずれにしても創造主の定められた義務と聖典に従って正々堂々勝負せよ、と。ドゥーリョーダナは水の中で云う。死ぬのが怖くて逃げたのではない (ibid. verse 36)。戦車、矢筒も、そのうえ御者さえも失い、孤立無援となったゆえ、暫くの休息を思い立った (ibid. verse 37) まで、湖に入ったのは自分の命が惜しいのでも、恐怖、悲しみでもない。唯疲れきったから (ibid. verse 38)。少し休んでから再び戦おうではないか (ibid. verse 39)。……私はクル一族、兄弟らのために王国を支配しようと試みたが、皆死んでしまった (ibid. verse 42)。富も、勝れた戦士も所有していない

私は寡婦同様のこの世を享受して、一体何になろうか (ibid. verse 43)。貴方を倒して、パンチャーラ、パーンドゥの誇りを打ち砕きたいと思っているだけだ (ibid. verse 44)。これからは鹿皮衣を着て、森へ入るつもりだ (ibid. verse 48)。友人や盟友ら、諸々の騎馬や象ら全てを失ってしまったこの大地は貴方のためにある。好きなように支配するがいい (ibid. verse 49)、と。ユーディーシュティラは云う。貴方は、私にこの世の栄華を譲ると云うのか。私は貴方からの贈物としての大地を統治したいとは思わない (ibid. verse 54)。贈物を受け取るのはクシャトリヤの本分ではない (ibid. verse 55)。戦において貴方を倒してのち、大地を統治するのだ (ibid. verse 56)。今や貴方は大地の統治者ではない。何故に権利資格のない大地を贈物にしようと云うのか (ibid. verse 57)、と。

そ) ドゥーリョーダナは一騎打ちを提案する

散々にやり込められ、惨めさに打ちのめされたドゥーリョーダナは大きな溜息をついて、遂に戦う決心をした (ibid. chap. 32, verse 7~9)。

友も戦車も象も、馬もない (ibid. verse 10)。武器を奪われた私が、戦車を有し、完全武装した無数の敵に対して徒歩で如何して戦い得よう (ibid. verse 11)。一騎打ちをするか (ibid. verse 12)。ビーマ、アルジュナ、クリシュナ、ユユダーナ (サーティヤキの弟)、ナクラ兄弟とでもいい。一人ずつ掛かって来れば貴方々に恐れることはない (ibid. verse 14~15)。全てを倒して、数多のクシャトリヤ、パールリカ、ドゥローナ、ビーシュマ、カルナ、ジャヤードウラータ、バガダーッタ、シャーリヤ、ブーリーシュラヴァス、我が息子、兄弟、シャクニ、友人全て、恩ある人々への借りを返すだろう (ibid. verse 19~21) と。ユーディーシュティラは云う。それでこそ、クシャトリヤの本分を知る人だ (ibid. verse 23)。何なりと好きな武器を選び、誰とでも一人ずつ選んで戦え。我々全てが相手する (ibid. verse 25)。仮に、我々の誰か一人でも倒されたならば、貴方を王に奉ってやる。そうでない場合は、我々の手にかかってあの世へ行くまでのことだ (ibid. verse 26) と。

た) ドゥーリョーダナは武器に棍棒を選ぶ、そして湖の中から立ち上がる

ドゥーリョーダナは云う。私に立ち向かい得るものを誰でもいい、一人選べ。この棍棒を持って徒歩で一騎打ちをしよう (ibid. verse 27)。私に立ち向かい得るものを誰か一人選べ (ibid. verse 28) と。ユーディーシュティラは云う。ガンダーリーの息子である貴方よ、かりにインドラ神が貴方に味方しようが今日が貴方の最後になるのだ (ibid. verse 33) と。ドゥーリョーダナは繰り返される彼の言葉の刺激に耐えられなくなり (ibid. verse 35)、非常な威力で水を波立たせながら勇敢な戦士は、激怒で大きな溜息をつき、黄金で飾られた堅固無比の重くて強力な棍棒で武装して、湖の中から立ちあがった (ibid. verse 36)。一度に一人の勝負だ。甲冑もなく、疲労困憊し、水浸しになり、深手を負い、戦車、象、軍隊も擁さない者を大勢で攻めるのは卑怯である (ibid. verse. 51~52)。神々は一人で戦う私を見守って下されよ (ibid. verse 53)。貴方は審判に相応しい資格がある故、立会人になれ (ibid. verse 54)」、と。何を

云うのだ。ドゥーリョーダナよ、あの唯一人のアビマーニュを大勢の戦車兵らがなぶり殺しにしたことを忘れたのか (ibid. verse 55)。クシャトリヤの務めは残酷なもの。如何なる温情も配慮も示さずに戦うものだ (ibid. verse 56)。甲冑を着け、髪を結び直し、何なり好みの武器を選べ (ibid. verse 60)、と。両者の間で言葉が往来した。

ち) ユーディーシュトラによる戦闘方法の提案の軽率さにクリシュナは残念がる

武器を装着したドゥーリョーダナはパンドウの五人の息子らに呼びかけた。貴方々五人の内の誰なりと一人ずつ、棍棒を取って勝負だ (ibid. verse 65~67)、と。ドゥーリョーダナへのユーディーシュティラの対応の軽率さにクリシュナは残念がる。一人でも殺し得たら王位に就けるなどつまらぬことを云う。万一、そうなったならばこれまでの苦労は全く無駄になってしまう。彼はビーマを倒そうと棍棒の技を充分磨き、鍛えている (ibid. chap. 33, verse 4)。憐憫の情から実に迂闊なことを口に出してしまったのだぞ (ibid. verse 5)。彼と対抗できるものはビーマしか居ないが、技は絶対ではない (ibid. verse 6)。確かに、ビーマは強力だが、ドゥーリョーダナは技の冴えがあり、力と技の戦いでは技の勝れている方が常に有利だ (ibid. verse 8)。そう云う相手にお前は、安心感と拠り所を与え、自分の立場を不利にしてしまった (ibid. verse 9)。………仮に、神であろうとも、今のドゥーリョーダナを倒せるものはこの世には居ない (ibid. verse 11)。尋常に勝負したらアルジュナ、ナクラ、サハデーヴァ、ビーマら、貴方々は彼の技量に敵わない (ibid. verse 12)。そう云う相手に自分らの内の一人でも殺せば王にしてやると云うなど何という愚拳だ (ibid. verse 13)、と。

口惜しがるクリシュナにビーマは云う。如何なることがあろうとも、彼を仕留めて見せる。この鎚矛は彼のものより壱倍半重いのだ (ibid. verse 18)、と。

つ) ドゥーリョーダナとの対戦者はビーマ

自信に満ちたビーマの言葉にクリシュナは元気を取り戻すと、彼を誉めそやし煽てる。貴方のお陰でユーディーシュティラは栄光を取り戻すだろう (ibid. verse 21~22)。貴方の手でドゥーリョーダナ兄弟を殲滅し、多くの王侯、王子、象が倒された (ibid. 23)。貴方と対戦することでドゥーリョーダナは間違いなく死ぬ。彼の骨を打ち砕き、誓いを完遂し得るだろう (ibid. verse 26)、とビーマに対して賞賛の言葉を述べた。

て) ビーマの怒り

この罪深い人を戦場において自分の棍棒で殺害するとき、私は自分自身の素晴らしい棍棒で、彼の身体を百片に破壊するだろう (ibid. chap. 55, verse 19) と。そして彼はその悪事の実を自らに確認するかのように云う。ヴァーラナーヴァタでの [我々を焼き殺そうとした] 企みを引き起こされた貴方自身の、またドゥリタラーシュトラ王の誤った行為を思いだせ (ibid. chap. 56 verse 30)、生理期で籠っているドラウパディーを集会の唯中に引きずり出し辱めた不当な処遇を思い出せ (ibid. verse 31)、ガンガーの息子 (ビーシュマ) は諸矢の寝台に眠り、ドゥローナもカルナも、そして非常に勇敢なシャーリヤも殺害された、悪のすべての根源

であるシャクニもまた殺害された(ibid. verse 34)、ドラウパディーの髪を掴んだプラーティカーミンは殺害され、貴方の勇敢な弟らも皆殺されてしまった(ibid. verse 35)。諸王は貴方の誤りを通して殺害された。私は今この棍棒で貴方の息の根を止めてやる(ibid. verse 36)、と。

と) ビーマとドゥーリョーダナとの棍棒戦の開始

そのとき、自分の棍棒を構えて、ビーマはドゥーリョーダナに突進した(ibid. verse 45)。戦いが開始された。

な) クリシュナの兄バララーマの気懸かり、クルークシェートラへ向かう

ところで、クリシュナの兄、バララーマがパーンドウ軍にもクル軍にも味方せず、サラースバティー河の巡礼に旅立った理由は、クリシュナの忠告も空しく、両軍の戦いが必死となったことを知った彼がクル軍側を味方することをクリシュナに提案したが受け入れられずに立腹したことである。バララーマはクル軍の状況が気懸りの旅であった。ミトラヴァルナ・ティールタで沐浴し、聖仙やシグダラの教えを聞いているところへ聖仙ナーラダが現れた(ibid. chap. 54)。喧嘩の種をよく撒き散らす彼に、バララーマは直ちに立ちあがり恭しく敬礼し、クル一族の破滅の様子を問う(ibid. verse 20)。クル軍は生存者僅か三名、クリパ、クリタヴァールマン、アーシュヴァーッタマンのみで(ibid. verse 28)、ドゥーリョーダナは湖の底に防護壁を作り潜んでいたが、パーンドウらに罵られ、それに耐え切れず浮上して(ibid. verse 31)、ビーマと決闘を開始しようとしている(ibid. verse 32)。今すぐ飛んで行くなれば、貴方は両弟子の戦闘の様子を見届け得るだろうと聞く(ibid. verse 33)に及んでバララーマはサラスヴァティー河に最高の賛辞を献上して(ibid. verse 34)後、クルークシェートラへ向かった。

バララーマの姿を見たドゥーリョーダナは喜びの表情を見せ、パーンドウの五人の息子らも彼と恭しく挨拶を交わした。彼はこのサマーンタパーンチャカが素晴らしい聖地であり、ここで戦死したものは必ず天国へ行けると云うことを彼らに告げた。

さあ、掛かって来い、とドゥーリョーダナが叫ぶと、不吉な兆しが現れた。ときおり強風が吹き荒れ、砂塵の嵐が巻き起こり、辺りは闇に覆われた。髪も逆立つような物凄い雷鳴が轟き、幾百という流星が音響と共に降下する。ときならぬ日食が発生し、大地は森の樹木を揺り動かす。熱風が吹き荒れ、小石を地面に打ちつける。山頂は次々と崩落し、獣らは逃げ惑い、恐ろしい野犬らが赤い口を開き泣き叫んだ。井戸という井戸は水が溢れ、不気味な大音響が辺りを震わせ、制圧した。平然と仁王立ちしているドゥーリョーダナを見ると、ビーマは怒りに駆られて声を荒げる。彼ら両者は鳳声を放って突進する。

に) 尋常の勝負ではドゥーリョーダナの勝ち

その死闘を見守っていたアルジュナはいたたまれず、クリシュナに問う(ibid. chap. 58 verse 1~2)。力ではビーマ。技ではドゥーリョーダナが勝る(ibid. verse 3)。尋常に戦っていたのではビーマに勝ち目はない。もし彼が不正に戦うならば確実にドゥーリョーダナを殺害できる(ibid. verse 4)。神々もアスラ族との戦いでは様々に相手を欺いて勝利を得て来た(ibid.

verse 5)。彼は賭博の席で、スヨーダナ(ドゥーリョーダナ)の太股を打ち砕くことを誓った(*ibid.* verse 7)。自分の誓いを叶えさせよう。惑わしをしたクル王を惑わし的手段で殺すのだ(*ibid.* verse 8)。危険が再度我々に降りかかられたことはユーディーシュティラの過失を通じてである(*ibid.* verse 10)。ビーシュマや他のクル族の撃破によって大変な偉業を成し遂げ、王は勝利と栄光を獲得し、交戦状態を殆ど終結していた(*ibid.* verse 11)。しかして、ユーディーシュティラの判断に重大な過失があった。殆ど手中に収めた王国を自ら手放すような約束を勝手に交わしてしまったのだ(*ibid.* verse 12~13)。ビーマが不正手段で彼を殺害しなかったならばかれはドゥリタラーシュトラの息子は確実に王国をものにするだろう、とクリシュナは答えた。

ぬ) アルジュナはビーマに向かって自分の左太股を叩いて見せた

その言葉を聞いてアルジュナはビーマに向かって自分の左太股を叩いて見せた。彼はその合図を了解し、目まぐるしく動き回った(*ibid.* verse 19~20)。ドゥーリョーダナも負けることなく、見事な技で応酬する。何時は果てるともない戦いに両者は疲れ果て、暫く休息し、再び戦いを開始した。突進してくるドゥーリョーダナを目掛けて投げつけたビーマの棍棒は彼に上手に回避されて地面に落ちた。彼は素早くビーマを攻撃した。猛烈な一撃を受けたビーマは大量の出血の激しさに無感覚になった(*ibid.* verse 38)。しかし、ドゥーリョーダナはそのことに気付かず(*ibid.* verse 39)、相手が打ち返して来るものと準備し、彼に強打を浴びせなかった(*ibid.* verse 40)。一息入れ、再度ビーマはドゥーリョーダナに猛烈に突進した(*ibid.* verse 41)。彼の目を眩惑させるため跳躍しようとした(*ibid.* verse 43)。

ね) ビーマがドゥーリョーダナの太股を打ち砕く

相手の動きを読み取ったビーマは素早く彼の太股を打ち砕いた(*ibid.* verse 46)。彼は地面に転倒した(*ibid.* verse 47)。その瞬間、一陣の強風が轟音と共に襲来し、雷が幾度か鳴り響いた(*ibid.* verse 49)。敵の総帥が大地に倒れ伏したとき、パーンドウ軍の生残り諸兵から大歓声が沸き起こり、法螺貝、太鼓、シンバルの大音響が空に木霊し(*ibid.* verse 53)、諸々の湖や泉は血を吐き出し、真っ直ぐに進み行く諸々の河は反対の方向へ流れて行った(*ibid.* verse 56)。勝ち誇ったビーマは叫んだ。愚か者よ、貴方は我々を雌牛と嘲ったと云うビーマは、左足でドゥーリョーダナの頭を踏みつけた(*ibid.* chap. 59, verse 3~5)。パーンチャーラ国の主だった部将らの多くはその行為を是認しなかった(*ibid.* verse 13)。

の) ビーマへのユーディーシュティラの諭しと溜め息

狂喜乱舞するビーマに対してユーディーシュティラは云う。手段の是非はともかく、貴方の目的を達成したからにはそのような振る舞いは止せ(*ibid.* verse 15)。ドゥーリョーダナは十一部門編成軍団の総帥であり、クル王であり、親族ではないか(*ibid.* verse 17)。今や親戚、友人、兄弟、軍隊も全てを失い、この決闘にも敗れた。憐れみを懸けるしかない身の上であり、もう侮辱するのは止せ。彼が王であることを忘れてはならない(*ibid.* verse 18)。このよ

うに、ビーマを諭して後、ユーディーシュティラはドゥーリョーダナに歩み寄って云う。兄弟よ、貴方はもう、怒りにも嘆きにも身を任すべきではない。これまでの自分の行為の報いを享受しているのだ (ibid. verse 21)。この本当に悲くて痛ましい結果は、抗し難い運命の為せる業だ (ibid. verse 23)。憐れみを受けるのは貴方ではなく、我々である。親友、身内を失い、惨めな思いで生きて行かねばならない (ibid. verse 27)。ドゥリタラーシュトラの息子の妻、子どもらは我々全てを呪うだろう (ibid. verse 30)」、と重い溜息を吐き、深い悲しみに閉ざされてしまった。

は) バララーマの激憤、ビーマよ、恥を知れ！

二人の決闘を見守っていたバララーマは非常に憤慨した (ibid. chap. 60, verse 3)。彼は自分の武器である鋤鎌を持ち、両手を高く翳して諸王の真中で云う。ビーマよ、恥を知れ (ibid. verse 4) と。何たる卑劣。このように公正な決闘で、臍から下を殴打するとは何たることだ。未だかつて、棍棒の合戦でそのような行為をしたのはビーマ以外にいない (ibid. verse 5)。臍から下の足は強打してはいけない。これは戦いの鉄則であり、兵法の定めるところだ。その掟に無知なるがゆえに、ところ構わず攻撃を加えてしまった (ibid. verse 6) と、激怒したバララーマは自分の武器、鋤を振り上げてビーマに迫った (ibid. verse 7)。

ひ) クリシュナのバララーマへの宥め

クリシュナは背後から彼を抱き締めて宥めて (ibid. verse 9)、云う。世間には人が求める六つの進展がある。まず、己自身の進展、友人の進展、友人の友人の進展、敵の消滅を進めること、敵の友人の消滅、敵の友人の友人の消滅を進めることだ (ibid. verse 11)。己自身、または友人に不幸が訪れたなら、それは己自身の破滅が近いと云う兆候である。人はそのようなとき救済を求める (ibid. verse 12)。パーンドゥ軍と我々は生来の友だ。彼らは我々の父親の妹の子どもらである。彼らは自分らの敵に酷く責め立てられていた (ibid. verse 13)。人の約束を守ることはその人の義務である。ビーマは、戦においてドゥーリョーダナの太股を棍棒で砕くことを宮殿の集会で約束した (ibid. verse 14)。聖仙マイートレーヤはかつて、ビーマが棍棒で貴方の両太股を打ち砕くであろうとドゥーリョーダナに呪いを懸けていた (ibid. verse 15)。これらを考慮すればビーマに過失はない。怒りを鎮めて下さい。パーンドゥと我々は生まれ、血縁、愛情に基礎を置いている (ibid. verse 16)。彼らの発展助長は我々のそれに直結している (ibid. verse 17)、と。

ふ) ビーマの行為は道義に反する

倫理的知識に精通しているバララーマは云う。道徳には常に善がついて回る。道徳には二つの動機、すなわち利益を求めるものの利益に対する欲望と、快樂への欲望である (ibid. verse 18)。道徳と利益、または道徳と快樂、あるいは快樂と利益とは区別を設けず、同時にこの三つを追求するものは大きな幸福を獲得する (ibid. verse 19)。だが、貴方が何と云おうとも、ビーマは道義から外れたゆえに、この三つの調和を崩してしまった (ibid. verse 20) と。こ

れに対してクリシュナは弁解する。貴方は常に怒りを断ち切り、公正さに徹していると云われている。心を鎮め、怒りに身を任せないで下さい (ibid. verse 21)。カリ・ユガ (世紀末) は間近なのだ。パンドウの息子(ビーマ)の約束を思い出して欲しい。ビーマはドゥーリョーダナへの借りを返済し、約束を果たしたのだと考えて欲しい (ibid. verse 22)、と。

へ) ドゥーリョーダナは敗北したが公正な戦士

クリシュナの詭弁に怒りを鎮めきれないバララーマは、彼が実行した違反行為が如何なる影響を残し、そのことがこれから如何に展開するかを視野に入れた正論を述べる。まともに勝負しているドゥーリョーダナを卑怯な手段で殺害したことで、パンドウの息子は狡猾な男と云われるだろう (ibid. verse 24)。他方、ドゥーリョーダナは敗北したけれども公正な戦士として永遠の至福を獲得するだろう (ibid. verse 25)。彼は可能な限りの戦いの供犠を整え、戦場において祭儀を開始し、最後に敵の火炎の上に、己の命を献酒として注ぐことで、最後の栄光の禊を完了したのであると、云い残して、馬車に乗り、バララーマはドヴァーラカーへ去って行った (ibid. verse 26~27)。

ほ) ビーマによるクル王の頭の足蹴を何故黙認したのか

バララーマが去った後、パンチャラ、ヤーダヴァ、パンドウらは意気消沈してしまった (ibid. verse 28)。塞ぎ込んでしまったユーディーシュティラにクリシュナは次のように云う。道義をあれほど弁えている貴方が、何故ドゥーリョーダナの頭を足蹴にするのを黙認してしまったのか (ibid. verse 30~31) と。彼は答える。激怒して足でクル王の頭を踏みつけるビーマの行為は不快だったし、同族の最後が嬉しかったわけでもない (ibid. verse 32)。ドゥリタラーシュトラの息子 (ドゥーリョーダナ) らによってこれまで常に騙されて来だし、数多の厳しい言葉を云われた。また、我々は彼らによって森へ追放された (ibid. verse 33)。それらの行為によって嘗めさせられた数多の悲しみへの思いはビーマの心中にあったし、総てのことを考慮して、私は見過した (ibid. verse 34)。あの貪欲で、愚かな激情家のドゥーリョーダナを殺害し、彼はその手段を選ばない行為であったが、自分の願いを満足させることができたのだ (ibid. verse 35)、と。

ま) クリシュナによるビーマの戦闘行為の容認

その言葉にクリシュナは苦悶の様子を見せながら、呟いた。そう云うことにしておこう、と。常にビーマを喜ばし、援助してやろうと願っていたクリシュナは、彼の戦闘行為を全て容認したのだ (ibid. verse 36~37)。ビーマは眼を見開き、ユーディーシュティラに云う。遂に、今日世界は、貴方のものになった。最早、邪魔するものはいない。心行くまで己の任務を遂行してください (ibid. verse 39~40)、と。諸敵らはいない、ドゥーリョーダナは倒され、クリシュナの指導の下で、大地は我々によって征服された (ibid. verse 44)。ビーマよ、貴方は母様への借りを返し、怒りを晴らすことができたのは幸運でした。勝利者となり、幸運にも、貴方の敵は殺害されました (ibid. verse 45)、と。

将兵らは口々に賞賛した。貴方のお陰で戦は終わった。貴方の他に誰が巧妙な策略を駆使している相手を殺害でき得ましようか(ibid. chap. 61, verse 9)、貴方はこれらの戦争行為において誰もなし得なかった終結をもたらしました (ibid. verse 10)、と。

み) クリシュナによるクルークシェートラの大戦終結宣言

彼らを制してクリシュナは云う。最早、骸も同然の人に幾度も罵声を浴びせるべきではない(ibid. verse 18)。この罪深い、恥知らずで貪欲な悪党は、側近のものに唆され、賢明な人々の忠告を無視し、不可避の死に遭遇したのだ (ibid. verse 19~29)。この卑劣な人は自分の友人、敵軍の何れに対しても考慮を忘れていた。いまや、木片と同様に化してしまった彼にどのような粗暴な言葉を使い得るだろうか (ibid. verse 21)。さあ、王らよ、戦車に乗ってくれ。我々はここを去るべきだ。幸運にも、この罪深い悪漢は自分の諸々の側近衆、親族、友人らと共に殺害された、と云うクリシュナの辛辣な言葉に、地面に倒れ伏していたドゥーリョーダナは激怒に駆られ、起き上がろうと試みる (ibid. verse 22~23)。

む) クル王ドゥーリョーダナのこの大戦におけるクリシュナの奸智批判

両腕で上体を支え、辛うじて上半身を起こした彼は、激痛をも忘れ、憤怒の目をクリシュナへ注いだ (ibid. verse 24)。そして、彼の口から鋭くて厳しい言葉がクリシュナを襲った。おお、カンサの奴隷の息子よ、貴方は恥知らずだ。何故なら私が不正に打ち倒されたことをよもや忘れてはおるまい。私の太股の打ち砕きについてビーマに思い出させる行為を引き起こさせたのは貴方だ。その行為を唆したのは貴方だ。アルジュナがビーマにその合図をしたのを気付かないとでも思っているのか (ibid. verse 26~28)。種々の不正の手段で正々堂々と戦う幾千の王らを殺害して来たことに恥も嫌悪も感じないのか (ibid. verse 29)。シカンディンを弾除けに立てて祖父ビーシュマを殺し (ibid. verse 30)、息子と同名のアーシュヴァータマンと云う象の名を語ってドゥローナの戦意を喪失させ、戦いを放棄した彼をドリシュタデムナに殺害させたのも貴方だ (ibid. verse 31~32)。アルジュナを倒すためにカルナがインドラから授かった唯一度有効の槍をガトートカチャの殺害に使わせたのも貴方だ。貴方ほど罪深い方はいない (ibid. verse 33)。片腕を切り落とされ、祈りを捧げているプーリシュヴァス王をサーティヤキに殺害させたのも貴方だ。ナーガ王タクシャカの子、アーシュヴァセーナの意図を拒んだのも貴方だ (ibid. verse 34)。カルナの戦車の車輪を泥濘にのめり込ませたとき、それを引き出そうとしているカルナを殺害させたのも貴方だ (ibid. verse 36)。もしも貴方々が私やカルナ、ビーシュマ、ドゥローナと堂々と戦っていたならば勝利は我々のものだった (ibid. verse 37)。クシャトリヤの作法に従って正規に戦ったあの沢山の諸王は貴方の卑劣な奸策で殺害されたのだ (ibid. verse 38)、と。

め) クリシュナの自らによる行為の正当化の根拠

クリシュナは手厳しく彼に云い返す。貴方の兄弟、親族、友人、将兵らが貴方の罪深い行為によって殺害されたのだ (ibid. verse 39)。貴方の諸行為を通して、あの二人の勇者、ビー

シュマとドウローナは殺害されたのだ。カルナは貴方の行為に追随したために惨殺されたのだ (ibid. verse 40)。貴方はシャクニの言葉に唆され、パーンドゥ兄弟らが父親から正当に譲り受けた王国を返却してやれと云う私の忠告に耳を貸さなかった (ibid. verse 41)。ビーマに毒を盛り、パーンドゥ兄弟を蠟製の宮殿に住ませ、クーンティー諸共に焼き殺そうとした (ibid. verse 42)。貴方はサイコロ賭博の専門家であるスヴァラの息子(シャクニ)を通じて、賭博に巧妙でない、有徳のユーディーシュティラを不正に滅ぼした (ibid. verse 44)。その後も数多の悪業を重ねて、パーンドゥを苦しめて来た。貴方はヴリハスパティやウシャナスらの忠告を聞き入れなかったし、長老を尊敬しなかった。貴方は有益な言葉をけっして聞こうとしなかった (ibid. verse 48)。貴方は制御できない貪欲と独占欲に取り憑かれて、不当な悪事を重ねてきた。その報いを今、受けているのだ (ibid. verse 59)、と。

も) クル王自身の人生の総括

ドゥーリョーダナは云う。私は法令に表現されてある種々の研究をし、広大な大地を海と共に統治し、諸々の敵の頭上に布告もした。私のような幸運なものは一体何処にいるだろうか (ibid. verse 50)。クシャトリヤが求めるところの最後は自らの階級の任務を遵守遂行することであり、戦いにおいての死であり、私もまた自分で合戦ができた。私と同様の幸運な人がありますか (ibid. verse 51)。私は諸々の快樂を楽しんだ。それらは諸々の神に等しい価値であり、また他の諸王によって大変な困難と共に獲得されるものであったが、私は最高の繁栄を獲得した。それ故、私は最高の幸運な者であり、私と同様の幸運をものにした人が他に居るだろうか (ibid. verse 52)。私の好意を寄せる人々と全ての弟らと共に、私は天界へ行きつつあります。困惑された諸目的と悲しみで苦しめられたこの不運な世界にどうぞ生き長らえて下さい (ibid. verse 53)、と。

や) クル王の帝王学の是認

このように聡明なクル王が述べ終わったとき、芳しい諸々の花々で一杯の驟雨が空から降り注いだ。ガンダールヴァらは沢山の魅惑する音楽の器機を打ち鳴らし、アーサラスらは歌でドゥーリョーダナ王の栄光を讃嘆し、シーツダスらはドゥーリョーダナ万歳と叫んだ。甘く芳しいそよ風が四方八方に優しく吹き、辺り一面が清らかになり、天空は瑠璃色のような群青色になった (ibid. verse 54~56)。これらの吉祥の徴、ドゥーリョーダナに供されたこの尊崇を見たとき、パーンドゥ軍はクリシュナと共に恥じをかかされた (ibid. verse 57)。ビーシュマ、ドウローナ、カルナ、そしてブーリーシュラヴァスが不正に殺害されたという姿ない声を聞いたとき、彼ら (パーンドゥ軍) は良心の呵責にさいなまれ、悲しみに咽んだ (ibid. verse 58)。

ゐ) クリシュナの進言、「勝利のための策略には是非はない」

不安と悲しみに打ちのめされたパーンドゥ軍を見て、クリシュナは深遠な声で彼らに云う。彼らの全ては偉大な戦車兵であつし、武器の使用においても巧妙であり、貴方々が各自の勇

気を振り絞ったとしても公正な戦いで、彼らを殺害することは決してできなかつたらう(*ibid.* verse 59~60) と。もしも、私が戦において、偽りの諸々の方法を採用しなかつたらう(*ibid.* verse 63)。彼ら四者は大変偉大な戦士であり、彼らはこの世におけるアティラータであり、大地の素晴らしい摂政(王)は公正な戦闘で殺害できなかつた(*ibid.* verse 64)。貴方(ユーディーシュティラ)は貴方々のこの敵軍を欺いて殺害したことを気に懸けるべきではない。敵軍の数が多大であるとき、その撃破は策略を使用する方法で実施されるべきものだ(*ibid.* verse 66)。アスラ軍を殺害するとき、神々自身は同様の道を選びました。天界の住者らによって施行された道は、全ての者らによって施行されるもののようである(*ibid.* verse 67)。我々には幸運が頂戴されており、いまは日暮れである。自分らの天幕舎へ退却するのがよろしいだろう。諸王各々、諸騎兵、諸象兵、戦車兵らと共に休息しよう(*ibid.* verse 68)。クリシュナのこの言葉を聞いたとき、喜びで充たされたパンドウ軍とパンチャラ軍は獅子のように叫び(*ibid.* verse 69)、法螺貝を吹き鳴らした(*ibid.* verse 70)。

ゆ) クリシュナがアルジュナを護衛した理由

大戦に勝利を収めたパンドウ軍らは道々、意気揚々と法螺貝を吹き鳴らし、クルの陣営に向かった(*ibid.* chap.62, verse1)。そこには主を奪われたドゥリヨーダナの天幕があり(*ibid.* verse 4)、ひっそりとしたその中には宮廷女、宦官、老臣らが大勢いた(*ibid.* verse 5)。パンドウらが戦車から降りると、クリシュナはアルジュナにガンディヴァ弓と矢の尽きることのない二つの矢筒を所持して降りることを命じた(*ibid.* verse 8~9)。彼に続いてクリシュナが降りる(*ibid.* verse 11) と即、軍旗の大猿は消え(*ibid.* verse 12)、戦車が燃え上がり(*ibid.* verse 13)、全てが灰と化した(*ibid.* verse 14)。不思議な光景を目の当たりにした彼はクリシュナに問う(*ibid.* verse 17)。彼は答える。戦車は既に種々の武器によって焼かれてあり(*ibid.* verse 18)、嘗てブラフマー神の武器によっても灰にされている。貴方が目的を達成できたし、私が離れたことで灰になった(*ibid.* verse 19)、と。

彼は幾らかの誇りと共にユーディーシュティラを抱きしめ、云う。勝利を収め得たのは幸運でした。為すべきことを速やかに実施しなされ(*ibid.* verse 20~23)。私がマツヤ国の都ウパラーヴィヤに到着したとき、貴方は私にアルジュナを護って欲しいと云った。それゆえ、私は彼を常に護り、ひいては貴方に勝利を齎しました(*ibid.* verse 24~25) と。全くその通りです。貴方以外にドゥローナやカルナが放ったブラフマー火矢を打ち破るものは居りません(*ibid.* verse 29)。貴方のお陰で私は皆と共に勝利を獲得しました(*ibid.* verse 30)。ウパラーヴィヤで聖仙ヴィヤーサはクリシュナの居る処に常に勝利があると私に仰いました(*ibid.* verse 31~32) と。彼らはクルの陣営にあった大量の武器の収められた沢山の櫃、膨大の金銀、宝石、その他装飾品、毛布、皮、数え切れない程の男女の奴隷を手に入れて、雄叫びを發した(*ibid.* verse 33~35)。

系) クリシュナによるクル王、王妃への慰めの言葉

その後、クリシュナは全ての息子を失ったガンダーリーを慰めてやって欲しいと云うパーンドゥ五兄弟に見送られて、急遽、ハースティナープラへ戦車を駆った(ibid. chap. 62, verse 41, 42)。それは、ユーディーシュティラの深い配慮からであった。彼は自分らが奸策を用いて、ドゥーリョーダナを倒したことを、彼の母ガンダーリーが知った場合、彼女の所有する恐るべき苦行の威力で彼らを焼き尽くすかも知れないことを恐れ、自分らが都に到着する前に、クリシュナに彼女を慰めてもらい、その怒りと嘆きを鎮めて貰おうと云うのである(ibid. chap. 63, verse 7~11)

クリシュナはクル王の都ハースティナープラへ到着し(ibid. verse 32)、直ちに宮殿へ参上した(ibid. verse 33)。そこには聖仙ヴィヤーサが既に来ており(ibid. verse 34)、クリシュナはヴィヤーサとドゥリタラーシュトラの足元に表敬の頂礼をし、王妃ガンダーリーに挨拶した。クリシュナはドゥリタラーシュトラの手を握り、はらはらと涙を流す。暫くして、作法に則り、水で目と顔を洗い、優しく彼は話し掛けた。貴方は過去、未来を見通され、時の流れをよく弁えておられる。パーンドゥらは貴方への敬愛から、自分ら一族、クシャトリヤの絶滅を回避するために一所懸命試みた。貴方の息子と契約を結び平和に暮らしていたが、イカサマ賭博に引っ掛かって全てを失い森へ放逐されていた。戦いの前夜、私自身が訪れ、諸侯の前でパーンドゥらに僅か五村で良いから分け与えて欲しいと頼んだ。しかし、貪欲と愚かさゆえに、貴方はそれすら許さず、クシャトリヤは根絶やしになってしまった。ビーシュマ、ゾーマダッタ、パーフリカ、クリパ、ドゥローナ、アーシュヴァーッタマン、賢者ヴィドゥラは常に、和平への道を説いていたにも拘わらず、貴方はその忠告を受け入れなかった(ibid. verse 44)。貴方ほどの人ですら運命の悪戯というより他ない力によって自らを欺き、愚行を積み重ねてこられた(ibid. verse 45)。これは運命のなせる業であり、パーンドゥの所為にしてはならない(ibid. verse 46)。倫理、理性、愛情、何れの観点からしても彼らには落ち度はない(ibid. verse 47)。貴方の愚かさの結果であり、一族の存続、葬式の供物、子孫を頼る全ての諸事は貴方とガンダーリーに関しては、パーンドゥらに頼るしかありません(ibid. verse 49)。彼らに恨みを抱くべきではない(ibid. verse 50)。ユーディーシュティラが貴方々を愛していることはよくご存知のこと(ibid. verse 52)。彼の心は貴方への申し訳なさ、悲しみで一杯であり、貴方々の悲しみを思い、恥ずかしさのために貴方々の前へやって来れないでいる(ibid. verse 55)、と。

そして、クリシュナはガンダーリーに対して云う。王妃よ、あの太鼓間の会合で、私の前で貴女は両家のためになる立派な発言をなさった。よく憶えていることだ(ibid. verse 59)。あのとき貴方は勝利を貪ろうとするドゥーリョーダナを叱責なされて次ぎのように申した(ibid. verse 61)。勝利は正義を伴うものだ、と。その言葉が実現されたのだ。今、嘆くには及ばない。貴女の苦行の力でご自分の一睨みはパーンドゥを灰燼に帰することもできましょう。し

かし、彼らの破滅を願ってはいけない (ibid. verse 62)、と。ガーンダーリーは云う。ケーシャヴァよ、貴方の云ったことは本当です (ibid. verse 63)。悲しみの余り心は乱れていましたが、貴方の言葉を聞き、落ち着きが戻ってきました (ibid. verse 64)。子どもを全て失った今、盲目の王は貴方とパーンドゥの息子らだけが拠り所であります (ibid. verse 65)、と。

を) ドゥーリョーダナの嘆き

解けた鬘を何とか纏め、大蛇のように重い溜息を吐き、悔し涙を流し、サーンジャヤを見つめたドゥーリョーダナは手で地面を叩き (ibid. chap. 64, verse 5)、髪を振り乱し、歯を食いしばり、ユーディーシュティラを責める (ibid. verse 6~8)。ビーシュマ、カルナ、シャクニ、ドゥローナ、アーシュヴァーッタマン、シャーリヤ、クリタヴァールマン、そして十一部門編成軍団を擁しながら、この有様だ。最早、天命の為せる業としか思えない (ibid. verse 9)。ブリーシュラヴァス、ビーシュマ、ドゥローナらも奴らの奸策にしてやられ (ibid. verse 11)、私もそれに引っ掛かった。そう云う卑劣な手段で勝利して如何して幸福に生きられ得ようか (ibid. verse 13)。いま身動きでき得ない、この地上の覇者であった私の頭を踏みつけたビーマの行為は誰も信じられないだろう (ibid. verse 15)。深い嘆きの底にある父上、母上にこのように伝えてくれ。……私は四海を遍く支配し、友人、身内には望み通りのものを与え、家臣、召使を充分に養って来た。今日まで全ての敵に打ち勝って来た (ibid. verse 17, 18)。私ほど幸運なものが何処に居るだろう (ibid. verse 19)。幸運にもクシャトリヤの掟に従って戦い、永遠の祝福の地へ行くことができる。戦に敗れ、奴隷のような生涯を送らないで済むのだ。私は自分の卑怯な手段で敗れたのではない。眠っているとき、不意討ち、毒を盛ったりして相手を殺害せず、戦の掟に背いた相手に敗れたのだ。アーシュヴァーッタマン、クリパ、クリタヴァールマンに告げてくれ。不正な仕業を数々犯したパーンドゥらを決して信用するな……と。そして貴方の息子はもっと卑怯な手でビーマに殺害されたと伝えさせてくれ。私は無一文の旅人のようになり、ドゥローナ、カルナ、シャーリヤ、ヴリシャセーナ、シャクニ、ジャラーサーンダ王、バガダッタ王、ブリーシュラヴァス、ジャヤードラータ王、ドゥシャーサナ、彼の息子、我が子ラクシュマナ、その他、何千という私のために戦った戦士らの後を追う (ibid. verse 31~34)。ああ、妹、ドゥシャラー(シンドゥ王ジャヤードラータの妃)は、夫と兄弟全ての死を知ったとき、どんなに嘆くことだろう (ibid. verse 35)。我が父、母、その息子の妃、孫の王女らの嘆きは何程か (ibid. verse 36)。息子ラクシュマナの母の嘆きは何程か (ibid. verse 37)。親友の托鉢僧チャールヴァーカ(ラークシャサ)はきっと私の敵を討ってくれるだろう (ibid. verse 38)。この聖地サマーンタパーンチャカで死に、永遠の祝福の地へ赴くのだ (ibid. verse 39)、と。この王の言葉によって、森も海も、動くもの、動かないもの全世界の全ては振動し、大音響を発し、四方は闇に閉ざされた (ibid. verse 41)。

使者はアーシュヴァーッタマンに、ビーマとドゥーリョーダナとの棍棒による決闘の最後の模様を伝えた。生き残った将兵らは深い悲しみに包まれ、其々の故郷へ帰って行った (ibid.

verse 43)。アーシュヴァーッタマン、クリパ、クリタヴァールマンの三人は全速力でドゥーリョーダナの下へ駆けつけた(*ibid.* chap. 65, verse 1)。嵐で倒れた沙羅双樹のように全身血まみれで地面に横たわり、苦悩する彼を見た(*ibid.* verse 5)。王の側には走り寄り、三人は王を囲んで座り込んだ(*ibid.* verse 11)。アーシュヴァーッタマンは目に涙を浮かべて声を掛けた(*ibid.* verse 12)。最高者である貴方がこのように埃まみれで地面に横たわっている。人の世に永遠のものなど存在しない(*ibid.* verse 13)。戴冠式で聖水を頭に振り掛けられた王族の先頭に立ち、世界の覇者となった貴方が、いまやこうして埃を食んでいるとは何と云うことか、時を弄ぶ運命の逆転を思わずには居れない(*ibid.* verse 17)、と。ドゥーリョーダナは両目の涙を拭い、クリパら三人の勇者に話し掛けた。死に従うのは創造主の定めるところだ。死はやがて全てのものにやって来る(*ibid.* verse 22, 23)。その死が、いま私のところにやって来た。世界を統治して来た私はいま、このように惨めな状態を余儀なくされている(*ibid.* verse 24)。幸いにも、私は如何なる不運に対しても戦で敵に背を向けない。幸運にも、私は卑劣な手段の敵に屈した(*ibid.* verse 25)。戦において私は、勇気と忍耐を常に示した。友人や全ての身内と共に戦で死ねて幸いである(*ibid.* verse 26)。貴方々がこの大惨事から免れ健やかに生きていることを見て、大変な喜びである(*ibid.* verse 27)。愛情から私の死を悲しまないでくれ。ヴェーダに真理と権威があるならば、私は確かに沢山の永遠の諸領域を獲得する(*ibid.* verse 28)。私はクリシュナの栄光を知らないわけではない。彼はクシャトリヤの務めを私に忘れさせなかった(*ibid.* verse 29)。私は彼を自分のものにしたのだ。誰も私のために嘆くことはない。貴方々は貴方々らしく為すべきことを為した。常に、私の成功に努めてくれた。だが、天命には勝てなかった(*ibid.* verse 30)、と。こう云うと王は目に涙を湛えて激痛に苦痛に襲われ、掻き乱された(*ibid.* verse 31)。怒りに拳を握り締め、涙に咽びながらアーシュヴァーッタマンは誓った(*ibid.* verse 33, 34, 35)。王よ、父の非業による最後の苦悩より増して、貴方の姿は私の心を突き刺します。今、ここで私の持てる全てのもの、敬虔、天賦のもの、神、神々の祝福に懸けて誓います。今日、クリシュナの目の前で、パーンドウ一族を必ずヤマの国へ送り込んでやります。何卒、それをお許し下さい(*ibid.* verse 33, 34, 35)、と。ドゥーリョーダナはそれを聞き、クリパに云う。おお、教師よ、水の一杯入った壺を持って来て下さい(*ibid.* verse 38)、と。クリパは水を運んで来ると、次ぎのように告げた。おお、最高のバラモンよ、私のためにアーシュヴァーッタマンを総指揮官に任命して下さい(*ibid.* verse 39)、と。王の命令により、アーシュヴァーッタマンをクル軍の最後の指揮官に任命した(*ibid.* verse 41)。就任の儀式が済むと、アーシュヴァーッタマンはドゥーリョーダナを固く抱き締め(*ibid.* verse 42)、雄叫びを上げて、その場を去った。血の朱に染まったドゥーリョーダナは独り、生類にとって恐るべき夜を過ごした(*ibid.* verse 44)。

以上のように戯曲作家バーサが関心を示したと思われる大叙事詩『マハーバーラタ』におけるドゥーリョーダナの周辺に展開されている事柄を収集することができる。この部分からも知られ得るようにドゥーリョーダナという人物を把握する場合、善玉悪玉という範疇で云々することは適当ではないだろう。

アーシュヴァメータ祭祀に象徴されるように、覇者は海を境界とする国を樹立することを王者の証しとする古代インドの王道論に則って突き進むとき、覇権奪取のためには策略は千変万化であるということを示認するならば、ドゥーリョーダナの率いるクル軍の一見理不尽な行為、詭弁的言動に対してもそれなりに彼らの行動を容認する理由と根拠が存在する。それ故、パーンドウの五人の息子軍、すなわちパーンドウ軍とドゥーリョーダナ率いるクル軍によるクルークシュートラの大戦はそれなりに客観的な視野が与えられていると云えるだろう。覇権争奪戦に和解は存立しない。

覇者となるのは唯一人である。ましてや、この大叙事詩の場合、同族、バラタ族内での覇権争奪戦は如何なることを意味するのか？

想定される事柄は肅清と云うことになるだろう。すなわち、覇権争奪戦には、それぞれの側に立って是非論が成立するのである。付随的要素を除去して云えば、弟クリシュナにクル軍の擁立を提案したバララーマの場合、クル家系の嫡男ドゥリタラーシュートラ側を擁立することは伝統的社会制度的慣習の踏襲であり、その提案を拒否してパーンドウの五人の息子軍を擁立したクリシュナの立場はパーンドウの妻クーンティーは血縁者すなわち、その子らの擁護ということである。

バラタ族同士であり、ドゥリタラーシュートラとパーンドウはヴァーサを父親とする異母兄弟である。長子ドゥリタラーシュートラは生来の盲目であり、王位を弟パーンドウに譲っていたが、彼の急逝後、王位を継承した。クル家とパーンドウ家の対立の源はドゥリタラーシュートラが、王位継承者の件で自分の長子ドゥーリョーダナの明白な劣勢にあることから抱くパーンドウの長子ユーディーシュテイラに対する羨望ということであろう。彼の我が子への偏愛は人情としては是認できる側面をもつが、彼の情愛は我が子ドゥーリョーダナ有能力・資質への正しい把握が欠落してしまったために收拾ができなくなり、ヴィヤーサの判断により、クリシュナを通じての肅清に待つこととなったと云うことであろう。

すなわち、大叙事詩でのビーマとクル王・ドゥーリョーダナの棍棒による一騎打ちの場面でビーマがアルジュナからの信号に気付いて、ドゥーリョーダナの太股に棍棒を打ち込んだのを見届けてヴィヤーサは天空へ立ち去っている。このことは何を意味するか？

戦士にとって、戦闘の規則違反はこの上ない不名誉なことである。正々堂々と戦っていたドゥーリョーダナに対してビーマによって違反行為である太股攻撃がくわえられた。ヴィヤーサは戦う両者の祖父である。その彼によってビーマの不正行為が黙認されたというのである。この場合の黙認は拒否には繋がらない。黙認は是認と同様の意味を含んでいる。それ故、こ

戯曲『ウールバンガ・Ūrbhaṅga (打ち砕かれた太股)』とその周辺

の一撃はクル軍に対する肅清の鉄槌と云うべきものであろうか。大叙事詩において、アルジュナが自分の太股を叩く所作は、クリシュナとの会話を通しての暗示を源としている。バーサの戯曲『ウールバンガ』は一幕ものであり、大叙事詩とは趣を異にして、クリシュナからの暗示信号の発信というように変更して展開を早めている。また、戯曲作家バーサは、大叙事詩と同様にアルジュナからの不正行為の暗示発信をさせた場合、アルジュナ自身をも巻き込んだ形での責任の追及ということに発展する可能性を察知し、正義の使者としてのイメージをアルジュナから損なわせるような要素を回避することを意図して変更しているのかもしれない。

大叙事詩でのビーマとクル王による棍棒戦の対決の場所は、クルークシェートラのサマータパーンチャカであり、この地で戦死したものは必ず天国へ行けるという聖地である。

バーサによる戯曲『ウールバンガ』の場面設定は、すでに、戦闘は終わり、太股を打ち砕かれて地面に腹ばい、苦悶するクル王の前に、膝上を乞いせがむ年頃の彼の息子が、彼の両親と二人の妃を案内してやって来る。その理由を作品中でバーサは、主人公ドゥーリョーダナの問いに対して息子ドゥールジャヤの答えとして処理している。彼ら一行は帰りの遅いクル王を捜しに来たというのである。もとより、クル軍の居城はハースティナプラ辺りであろうか。

この戯曲で作者が戦場にクル王家族全員を登場させている狙いはなにか。作者によって作品の後半に処理されているものは、王自身の死滅後の両親、二人の妃、息子の身の処し方である。このことについての推察が許されるとすれば、作者はクル王ドゥーリョーダナが、自ら先立ち、残されるクル家の遺族らに対してパンドウの妻クーンティー、五人の息子ら、その共同妻ドラウパディーらの博愛に委ねた生活を送ってくれることを願っているように、希望的に語りかける会話を作品中で交わさせている。作者は、この一幕劇にクル王家の全員を登場させて、王の終焉までを描写していることは、古代インド亜大陸における、栄えあるバラタ族の王者の最後が決して野垂れ死にではない、と云うことを観客、読者諸氏に取えて語りかけているかのようである。そこには、同族パンドウ軍への抗争による軋轢の要素は微塵も感じられない。そして、そこに訪ねてきたアーシュヴァータマンが、ドゥールジャヤに云う。貴方は、未だ灌頂を済ませていないが、父王の勇気ある行為の相続遺産の王国を腕力で征服したとき、王になられよ、と。この言葉は、クシャトリヤの毅然とした誇り、美学とでも云うところかもしれない。

このように考察してくると、大叙事詩でのクルークシェートラの大戦の終わりに際して、ユーディーシュティラが、自軍のクリシュナの援助を得て弟アルジュナによって殺害されたクル王の武将カルナが実兄であることを聞き知り、自己嫌悪に陥っているときに、祖父ヴィヤーサの、この戦は繁栄し続けてきたバラタ族への肅清であり、不可避の出来事であり、貴方の責任ではないというような意味合いの言葉が思い起こされる。

この戯曲『ウールバンガ』で、作者はその場面を戦場に設定してある。その前半で大戦の壮絶さを三人の兵士らに語らせてあり、彼らはビーマとドゥーリョーダナとの一騎打ちの終わりまでを語って退場させている。その戦慄する戦場に太股を砕かれて伏す主人公が登場させられているのであるが、戦闘規則に則って堂々と戦い続けていたドゥーリョーダナの口から語られる言葉には悲劇的雰囲気はない。その他の登場人物らに語らせている会話にも一通りの情愛の交流を感じさせるものがある。そうした脈絡には王家の見解を読み取ることができるところだろう。

プサルカルはバーサによって大叙事詩と異なるドゥーリョーダナの性格設定が試みられてあることについて、作品を諸方面から検討、分析した結果、その意図するところを述べる⁽⁶⁾。すなわち、作品のドゥーリョーダナは全インド亜大陸を統治する気高い大王であり、家族にとって理想の息子であり、理想の夫君であり、理想の父親であることを示すために登場させられてあり、悲劇作品であるということに拘らないとしている。本稿で、ここにいささか粗雑を否めない検討を施してきたところからも知られ得るように、この作品を敢えて「悲劇」であるという範疇に押し込めて鑑賞しなければならないという見解には幾らかの疑問を指摘することができるだろう。それにもまして、作者バーサはクシャトリヤの王道と勇武をこの⁽⁷⁾一幕劇の中に如何に展開するかということに腐心しているかを伺える作品であると云えるだろう。以下に、作品の試訳⁽⁸⁾を添付することにする。

【注】

- 1) 中野義照訳『インドの純文学』p. 183. 高野山大学日本印度学会, 1966. : (tr) Subhadra Jha : History of Indian Literature, vol. III, p. 208. Delhi, 1985.
- 2) A. D. Pusalkar : Bhāsa, A Study, p. 203. Delhi, 1968.
- 3) ibid. p. 203.
- 4) 拙論 : 戯曲『カルナバーラ (Karnabhāra/カルナの苦勞)』とその周辺 [I] 『聖徳学園女子短期大学紀要』第24集 (1994. 3) P.P. 5~6.
- 5) 拙論 : 同名 [I] & [II] (1997. 3) P.P. 25~47.
- 6) 注 (2) 前掲書, p. 204.
- 7) 注 (1) 前掲書, 中野訳 : p. 184.
- 8) テキスト, (ed) Baldeva Upadhyaya : The Bhāsanāṭakachakram, vol. 1, (6) Ūrubhānagam. Vanarasi, 1960.

【参考文献】

- ① (tr.) M. N. Dutt ; Mahābhārata, 7 vols. Delhi, 1994.
- ② K. Subramaniam ; Mahābhārata. Bombay, 1965.

戯曲『ウールバンガ・Ūrbhaṅga (打ち砕かれた太股)』とその周辺

- ③ 山際 素男編著；『マハーバーラタ』全9巻。東京, 1991~1998.
- ④ C. ラージャコーパーラーチャリ著、奈良毅&田中嫺玉訳『マハーバーラタ』上・中・下。
東京, 1975.

野 部 了 衆

試 訳

バーサ作、ナータカ劇『ウールバンガ・Ūrbhaṅga (打ち砕かれた太股)』

第一章

(祝禱の終わり、そのとき座長登場)

座長：——ビーシュマとドゥローナという岸を、[シーンドウの王] ジャヤードラータという水を、ガンダーラの王[シャクニ]とう湖を、カルナとドゥローナの息子(アーシュヴァータマン)とクリパという波と河鱈と海鱈を、ドゥーリョーダナという奔流を、矢と剣という砂を、アルジュナは小舟で横断されます。それゆえ、かの崇拝すべきケーシャヴァは諸敵の征服において貴方々の小舟でありますように。(1)

私は貴紳諸氏方に、このようにお伝え致します。おお、何故でしょうか？ それは知らせによって心乱された言葉のように述べられてありますが？ そうであります！ 私は存じ上げております。

(舞台の背後で)

おお、我々はここにあります！ 我々はここにあります。

座長：——まったく明白であります。認識されてあります。

(登場して)

従者：——尊者様よ、これらの人々は何処から来ておられるのでしょうか？

天界へのために戦の前線で肉体の献供に従事され、四肢を鉄製の百本の鎚でささくられたされており、身体は発情した象王の突き刺す行為によって掻き引き裂かれてあります。あちらこちらで勇気の試金石を所有するその人々はさ迷い歩きます。(2)

座長：——尊い人よ、貴方は何を理解できないのでしょうか？

ドリタラーシュトラの軍には百人の息子と支配管理を断念し、ドゥーリョーダナの生存が保たれてあり、ユーディーシュティラの軍にはパーンドウ五王子とジャナルダナの生存が保たれてありました。サマータパーンチャカという戦場には諸々の王らの身体によって散在されてあります。

ここに、戦で殺害された象、馬、王、兵士が詰め込まれた、混合せられた記録のような絵画があります。ヴリコーダラ(狼の殺害者、ビーマ)とスヨーダナ(ドゥーリョーダナ)の戦闘が始まりましたとき、兵士は人々の主(王)のために死の一室へ入りました。(3)

(一同退場)

幕間劇

(そのとき、三人の兵士が登場する)

[兵士] 一同：——おお！ 我々はここにあります。我々はこちらにおります。

第一 [の兵士]：——我々は戦争と呼ばれる仙者の住まいの場所へ到着致しました。ここは、

敵対の住まいであり、勇気の試金石であり、誇りの憩われてある家であり、諸々の戦においてアープサラス（天界の女）らの自選の集会であり、男らしい勇気の憩うところであり、諸々の王らの最後である死のためにあるヴィーラ（勇者）の寝台であり、威力ある火炎のための供犠であり、諸王らの天空への移転があります。（4）

第二 [の兵士] —— 貴方は正確にお話になりました。戦で実行された死があり、そこには諸々の象王らの死体の山が不揃いの諸々の石のようにあります。

あちらこちらに秃げ鷹の住まいが作られました。諸々の戦車は殺害された大戦士らを所有してありました。大地の統治者らは天界を獲得せられました。その彼らは面と向かって剣と剣に相対して長時間打ち合い殺害されたのであります。（5）

第三 [の兵士]：——それは、その通であります。

そこには素晴らしい鼻を所有するもの（象）の牙のような供犠の柱があり、矢に装着されたダールバ（聖草）があり、殺害された象の高い山積があり、敵対の供物を齎すもの（火）が灯されてありました。旗を広げられた集まりがありました。声高に獅子の唸り声のようなマントラ（呪文）があり、[供犠用の] 動物のように [大地に] 倒れ伏した人々は戦という供犠を完遂されました。（6）

第一 [の兵士]：—— 貴方々二人は、その他の方を御覧なさるべきであります。

そこには、口を肉 [の血] で湿らせているあの鳥らは各々の諸々の矢によって命を奪われてあり、戦場の地面に身体と共に横たわっている諸々の王らの諸装飾品を死体から解きほぐしています。（7）

第二 [の兵士]：—— 専心されてあり、鉄製の矢による襲撃によって射られてあり、すべて戦の準備が整えられてあり、引き裂かれた甲冑を装着している、矢と弓によって象は、人々の守護者（王）の武器の隠し場所のように崩壊されます。（8）

第三 [の兵士] —— 貴方々二人はその他の方を御覧なさるべきであります。

歎かれた野犬らは、旗の先端から落下された花輪で作られた裸頭に被る花冠を所有する、ただ一本の最高の矢に固執されて死んだ戦車兵を、婦女らの親族が幌つき車から娘の夫君に試みるように戦車の前方から引きずり降ろしています。（9）

[兵士] 一同：—— ああ、しかして実に、これがサマータパーンチャカ [という戦場] の恐怖させるものであります。そこには殺害された象、馬、人の地で赤く覆われた大地の部分があり、破壊された鎧、皮製の傘、チャウリー（頭上飾り）、鉄製の投げ鎗、甲冑、胴などなどが無秩序に散在してあり、刀、斧、矛、釘付き鎗、鎚、矢、投鎗、恐ろしい棍棒などなどの諸々の武器によって覆われてあります。

第一 [の兵士]：—— さて、すべて [その通りであります]。

殺害された象らの橋を諸々の血の河（流れ）は横切っています。人々の守護者（王）によって放棄され、御者の転落せられたことで諸々の馬らは諸々の戦車を牽引しています。頭を落

失せられた諸々の胴体は以前からの習慣で走っています。[乗り]人から解き放たれ狂乱せられた諸々の象らは何処の場所でも徘徊しています。(10)

第二[の兵士]：——貴方々は、その他の方を御覧なさすべきであります。彼ら、秃げ鷹らは、マードッカ花の芽のように非常に赤褐色の目をしており、ダイーティヤの主（バリ）の所有する象を御すための先の釣った突き棒のように鋭い嘴をもち、広げられた巨大である翼で充たされてあり、諸々の肉片を掴んで大空で輝いています。あたかも、若芽をあしらったターラ樹のように。(11)

第三[の兵士]：——放棄された馬、象、人々の統治者（王）、兵士らが太陽（日の光）の厳しい諸々の光線によって至る所に明らかに示されてあり、鉄製の矢、投げ鎗、矢、鎗、剣によって散在されたその地面は打ち倒された群れを支え持っているかのようであります。(12)

第一[の兵士]：——ああ、そのような状態においてさえも解かれて優雅さを所有する武人階級の者らは輝きます。

その彼らは、諸王らの恐怖のない（勇敢な）顔々によって滑り落ち緩められた、飛び出された目のような六本足の所有者（蜜蜂）の群れをもち、赤褐色の唇のような花卉の群れをもち、眉毛のように曲げられた花薬をもち、自分の冠に置き換えられた新しい睡蓮の花弁をもち、勇気ある太陽によって目覚めさせられてあり、戦の前線で鉄製の矢によって高く持ち上げられています。

第二[の兵士]：——死神は、このような状態にある兵士らにさえも優勢であります、と云うのでありますから、諸々の困難な状態にある人々によって自身の力を実行することはまことに不可能であります。

第三[兵士]：——まったく死神こそは諸々の兵士に勝利すると云うのでありますよ。

第一[の兵士]：——何か疑うところがありますか？

第二[の兵士]：——いいえ、このように、そこには何ら存在いたしません。

パールタ（アルジュナ）によって、カーンダヴァ[の森]の煙で色つけられた徳を所有する、選り抜きの兵士を滅ぼす天界の叫び（音）で追い払う傷つけられ得ない甲冑で護られた命を供物とする弓（ガンディヴァの弓）を手にとられてのち、マヘーシュヴァラ（シヴァ）と共に戦で射られた諸々の矢によって、誇りで増大させられた力を所有する諸々の王らは、戦の前線で死神に捕獲されたのであります。(14)

[兵士]一同：——ああ、音が[聞こえます]。

何故に雲らが鳴っているのでしょうか？ 山々が落雷で碎かれているのでしょうか？ それともまた、マーンダラ山の内部の洞穴が集まっている大地が、何故に騒々しい騒音の恐怖をとまなう諸々の旋風によって破裂させられるのでしょうか？ また天界は何故、風に揺り動かされた振動で煽られた波で充たされた音を解き放たれるのでしょうか？ (15)

そうであります。実に貴方は確かめるべきであります。

(一同歩き回る)

第一 [の兵士]：——ああ、実に、ここにドラウパディーの頭髪への侮辱で動揺させられてあり、パーンドウの [五人の] 兄弟の真中であるビーマセーナと百人の兄弟の殺害への怒りを所有するドゥーリョーダナとのそれ (戦い) は、ドヴァィパヤナ、ハラユーダ、クリシュナ、ヴィドゥラらの居並ぶ前でクル族とヤドゥ族の家系の尊敬を受けるに値する棍棒の戦が始められました。

第二 [の兵士]：——ビーマの美しい黄金の石のように盛り上がった胸は強打されており、ヴァーサヴァ (インドラ) の所有する象の鼻のように堅牢なドゥーリョーダナの両肩は引き裂かれてあります。そのそれぞれ腕の一对の間に構えられてある武器があります。そこ [での戦] において、激しい戦闘によって発せられた騒音が生まれました。(16)

第三 [の兵士]：——これは大王様であります。

彼は頭を振り動かすために冠が移動しており、激怒の炎をともなう瞥見の顔をもち、堅実な状態を確保するために小人のように収縮した身体を持ち、腕の先端部を引き上げています。その彼のあの敵の血による湿りで覆われた棍棒は手の指部分において輝いています。あたかも、カイラーサの山頂において用意されたマヘンドラによる稲妻の炎のように。(17)

第一 [の兵士]：——彼が戦闘によって血で濡れられた身体を所有するパーンドウの息子であります。それを貴方々は御覧なさるべきであります。

打ち砕かれた前額から血を滴らしており、打ち砕かれた肩の隆起の一对をもち、強打によって流され、集合された血で塗られた胸をもっており、棍棒での強打によって血で酷く濡れた傷をもつ彼 (ビーマ) は輝いています。あたかも、岩石だらけのメール山が鉱物を含む水の流れによって [赤く] 塗られた石のように。(18)

第二 [の兵士]：—— [戦の] 技術を獲得している人々の主 (王) は恐怖の棍棒を投げ下ろし、飛び上がりながら叫びます。素早く腕を運んで彼 (ビーマ) の行為を回避し、動き回る行為を遂行します。常に攻撃しますが、しかし、ビーマは強力であります。(19)

第三 [の兵士]：——彼ヴリコーダラであります。

頭に酷く打ちこまれた、滴る血で湿った身体をもち、大地の所有者 (山) のようであり、諸々の戦いにおいて無比であります、その彼は大地に入り込みます。放たれ、広げられた鉱物を所有するヘーマクータ (黄金の頂) 山のように、落雷によって破壊された山の主 (ヒマーラヤ) が大地に入り込みますように。(20)

第一 [の兵士]：——これは嘲笑を浴びせられ、弱めさせられた身体を所有するビーマセーナを見たとき、一本の指先で支え、上向きに保ち、驚かされたヴィヤーサは佇まれました。

第二 [の兵士]：——そきに、涙で充たされた目をもつヴィドゥラは佇まれました。ユーディーシュティラが哀れむべき状態になります。

第三 [の兵士]：——クリシュナはアルジュナによって触れられたガンディヴァの弓を所有

する空中を見えています。

【兵士】一同：——戦闘の観覧者であるバララーマは弟子への愛情のために鋤を振り回します。(21)

第一【の兵士】：——彼は大王様であります。

勇気の住まいであり、種々の宝石で多彩な王冠を装着しており、また誇りと規律（訓練）と威厳と大胆さに結合されています、その彼は嘲りながら言葉を話します。すなわち、ビーマよ、勇者は臆病者を攻撃致し、諸々の戦において恐怖を捨てますよ。(22)

第二【の兵士】：——いま、嘲笑をしているビーマセーナを見て、自分の太股を叩き、ある信号（合図）をあのジャーナルダナ（クリシュナ）は発信致しました。

第三【の兵士】：——その信号によって、あのマールティ（風神に属するもの、ビーマ）は復活させられました。

眉をひそめて、額の窪みにおいて汗を手で拭っており、チトラーンガダーと称する自分の棍棒を両腕に握りながら、哀れな息子を見てのち、すべての行為によって与えられた威力を獲得したように叫んでおり、ビーマセーナの顔を有し、獅子の胸のような光景を所有する彼は大地の表面から、より一層大きな叫びと共に立ち上がりました。(23)

第一【の兵士】：——おお、再び棍棒の戦闘が開始されました。実に彼は手の掌を地面に擦り付けて素早さと共に、両腕を素早く拭って、公正への動揺を捨てて、噛み締められた両唇の隙間で勇猛な力から一層の激怒を叫びあげました。パンドウの息子（ビーマ）によってその棍棒はガンダーリー妃の息子両太股に浴びせられました。(24)

【兵士】一同：——ああ、なんとまあ！ 大王様が倒れられました。

第三【の兵士】：——血で滴らされており、輝かされている身体をもつ、倒れられたクル族の王を見てのち、かの尊者ドゥヴァイパーヤナ（洲で生まれた者、ヴィヤーサ）は空へ昇り行きました。

彼は花冠で覆われた視界をもち、鋤の所有者（バララーマ）によって目を覆われました。【ドゥーリョーダナへの】考慮のために怒りで目を閉ざされた鋤の所有者を見て動揺させられたパンドヴァのドゥヴァイパーヤナによって知らされた、クリシュナの腕で支えられた行為をビーマが達成致しました。(25)

第一【の兵士】：——ああ、怒りによって見開かれた猛烈な目をもち、ビーマセーナによって正規の手順でないことを認知している、かの尊者（バララーマ）はそれゆえに、実に接近致します。その彼は、揺れ動く頭頂飾りを付けており、怒りで赤銅色になった大きな目をもち、大黒蜂の口で噛まれた若干の花輪を引き寄せて、黒い身体に吊り下がっている衣服を引きずっている彼は、地面に沈む月の光輪のようであります。(26)

第二【の兵士】：——そのとき、我々はたった今、大王様の随行員になるべきであります。

他の二人【の兵士】：——そのように致しましょう。確かに、素晴らしい示唆であります。

(一同退場)

(そのとき、バラデーヴァが登場する)

バララーマ：——おお、おお、諸王らよ、これは相応しくありません。

私の、敵の力に死を齎す鋤を無視され、また誇りから戦闘の行為にかかわりをもつ私を意に介さないで戦闘の始まりにおいて、彼によってかの棍棒を、卓越した家系であり、従順な振るまいを伴うドゥーリョーダナの両太股に投げつけられました。(27)

おお、ドゥーリョーダナよ、ともあれ、まず、貴方は暫くの間、命を維持すべきであります。

私はサウーバという都に先頭部を残してきた、偉大なアシュラの都にある城壁の頂上にへばり付いているカリーンディ (ヤムナー) 河の水への案内者であり、敵の軍隊の力の生命の贈り物によって表敬されており、手で支持された鋤をビーマの血と汗で湿り泥濘で充たされている、大きく広い胸において為させます。それはあたかも、ケーダラ山の道において圧倒させられますように。(28)

(舞台の背後で)

貴方様は慈悲深くあれ、貴方様は慈悲深くあられますように。尊者であられる鋤の武器で戦う者よ。

バラデーヴァ：——ああ、なんとまあ、この状態にあってさえも、哀れな自分でどうすることもできないドゥーリョーダナは私に追隨いたします！ その彼は、威厳を所有しており、戦のチャンダナ (梅檀) である血で塗られた湿りを有する皮膚をもち、地面を這うために塵埃で薄赤色になった腕をもち、幼子の [這い回る] 生活様式を演じさせられてあります。あたかも、アムリタ (甘露) の攪拌を完了したとき、アシュラらに伴われた神々らによって大地の所有者 (山) から解き放たれた、水の中でとぐろを巻き攪拌することにおいて試み、疲労させられ、捨てられたヴァースキ (カーシュヤパの息子、蛇族の王) のようであります。(29)

(そのとき、打ち砕かれた太股の一对を有するドゥーリョーダナが登場する)

ドゥーリョーダナ：——ああ！ [私は] これであります。

ビーマによって、[戦闘] 規定の適用に違反して棍棒で打ち砕かれ、負傷を負うた、傷めさせられた太股をもつ私は大地において両腕で引き擦りながら、半身不随にさせられた身体を運びます。(30)

貴方様は慈悲深くあれ、貴方様は慈悲深くあられますように。鋤で戦う者よ。

大地 (地面) に倒されて居ります者のこの頭は、今日最初に貴方様の両足に伏せられました。それゆえ、貴方様は怒りを鎮めくださいませ。彼ら (パードウの五兄弟) はクル族の先祖への供物の雲々として生きて供されませよ。そしてまた、敵意の戦の言及を所有する我々は滅亡いたします。(31)

バララーマ：——おお、ドゥーリョーダナよ、暫くの間、貴方自身は生きられますように。

ドゥーリョーダナ：——貴方様よ、何が為されるのでしょうか？

バララーマ：——おお、貴方は聞かれるべきであります。

投げつけられた鋤の先端で裂かれた身体をもち、棍棒の強打によって碎かれた肩と心をもち、諸々の戦車、馬、象らを伴う戦争で殺害され、天国へ達する人々にパーンドウの息子らを私は貴方に齎すでしょう。(32)

ドゥーリョーダナ：——いいえ、いいえ、尊者様よ、このように、

[バラ] ラーマよ！ ビーマが誓いを完遂されたとき、客人の兄弟らは天界へ行かれました。そして同様に私においてもまたこのように、行かれるでしょう。そのときそもそも、戦が何を生むと云うのでありましょう。(33)

バラデーヴァ：——私の目の前で、貴方が騙されました、ということに私の怒りが生じさせられました。

ドゥーリョーダナ：——騙されたというように、貴方様は私をお考えになられています。

バラデーヴァ：——何が躊躇致させるのでしょうか？

ドゥーリョーダナ：——おお！ ああ！ 私の命は[樹木の]根元に与えられたもの(水)のようなものであります。何故なら、灯された火炎で猛烈である蠟(樹脂)を塗りこめた家から自分(生命)を救出する判断力を所有してあり、ヴァイーシュヴァナ(クベーラ)の住居での戦において、山の岩石を突進によって振動させるものであり、ヒディーンバというラークシャサの主の生命を継承している者でありますビーマによって、もしもこのように私への策略の勝利を、貴方様が気付いているならば、おお、[バラ] ラーマよ、私には今日、勝利はありません。(34)

バラデーヴァ：——いま、ビーマセーナによって貴方の戦の策略を用いられて生き延びられるでしょう。

ドゥーリョーダナ：——また、何故に私はビーマセーナに騙されたのでしょうか？

バラデーヴァ：——何故に、貴方はこのような状態になられたのでありますか？

ドゥーリョーダナ：——[貴方様は]聞かれるべきであります。

インドラのパリジャータカタル(願いを叶えるサンゴ樹)が誇りによって奪われているのと同様に誇りによって奪われており、また、天界において千年を大洋の水の中で快樂と共に眠られたかの世界の最愛なるもの・ハリ(ヴィシュヌ)によっているように、彼(クリシュナ)によって、恐ろしいビーマの棍棒を突然に取り込んで、正規の戦の誠実な行為を有する私は死ぬ羽目に合わされてあります。(35)

(舞台の背後で)

振り捨ててください。振り捨ててください。尊いお方様方よ。振り捨ててください。

バラデーヴァ：——(見回して)ああ、この紳士よ、ドリタラーシュトラとガンダーリー

がドゥールジャヤによって指し示された道をやって来ており、後宮の住人らに伴われており、心は悲しみによって征服され、行為はうち震え、実にやって来ます。その彼は、勇気の源（鉦脈）であり、百人の息子らに分配された目（視野）をもち、自尊心（誇り）によって高揚されており、黄金で作られた供犠用の柱のように垂れ下がる腕をもち、第三界（天界）の守護において露見された諸々の疑惑を抱いた神々によって敵のような牢固な暗黒によって討たれた目を所有する彼は決断を致しました。(36)

（そのとき、ドリタラーシュトラとガンダーリーと

二人の王妃とドゥールジャヤが登場する）

ドゥリタラーシュトラ：——息子よ、貴方は何処にいるのですか。

ガンダーリー：——息子よ、貴方は何処にいるのでしょうか。

両王妃：——大王様よ、貴方様は何処におられるのでしょうか。

ドゥリタラーシュトラ：——おお、ああ、なんとまあ！

今日、私の息子が戦において策略によって打ち倒されましたということを聞きましたとき、顔にある秘密の（隠れた）涙を所有する目の盲目は一層きつくさせられました。(37)

ガンダーリーよ、貴方は何処に止まっているのですか。

ガンダーリー：——私は生命において不幸の運命を所有しております。

両王妃：——大王様よ、大王様よ。

王：——おお、ああ、なんとまあ！ 私の両妃においてさえ、悲嘆にくれておりますとは。

いまだかつて、私は棍棒による攻撃の苦痛を知りませんでした。しかし、いまや私は戦場へやって来た、照り輝く頭髪を所有した、私の後宮の婦女らを考慮致します。(38)

ドゥリタラーシュトラ：——ガンダーリーよ、ドゥーリョーダナという名前の家系の誉れは何処に見られ得ますか？ なんとまあ！ 今、私は盲目であります。その私は見出だされるべきで、息子を見られ得ないのであります。おお、運命に呪われるとは！

敵を戦で打ち負かす、自尊と勇気で燃え上がられてあり、地面にばらまかれた、誇り高い百人の息子を儲けている彼ドリタラーシュトラは、一人の息子によって送られた種子をただの一度でさえも食するために如何なる資格もないのでありましようか？ (39)

ガンダーリー：——我が子、スヨーダナよ、私に返事をください。百人の息子への希望を失い苦悩している大王様に勇気を起こさせてくださいな。

バララーマ：——ああ！ ここに、かの尊いお方ガンダーリー様であります。

息子らや孫らの顔に対して喜びの目を持ち、ドゥーリョーダナの倒壊によって投ぜられた悲しみを飲み込まれた堅忍不拔を有する彼女は、いまや、常に涙で湿った、この夫君への義務（ダルマ）のための印である眼帯を着けています。(40)

ドゥリタラーシュトラ：——息子よ、ドゥーリョーダナよ！ 十八軍団からなる完全な軍隊を所有する大王よ、貴方は何処にいるのでしょうか？

王：——いま、私は大王様のところにいます。

ドゥリタラーシュトラ：——百人の息子の長子よ、貴方は遣って来なさい！ そして、私に返事をしてください。

王：——確かに、私は返答を致します。この出来事によって恥をかかされた私があります。

ドゥリタラーシュトラ：——息子よ、来なさい。貴方は私に挨拶をしなさい。

王：——これ、これ、私は来ております。(立ち上がろうとして、倒れる) ああ、どうしようもありません！ これは私にとって二番目の衝撃であります。ああ、おおなんと！

ビーマセーナによって棍棒の打ち込みと頭髪のわし掴みが為されたとき、今日、両太股と共に私の父様の足への表敬頂礼が奪われました。(41)

ガンダーリー：——ここに、愛する両娘よ！

両妃：——尊いお方様よ、私たち二人はここにおります。

ガンダーリー：——貴方々両人は夫君を捜しなさい。

両妃：——不幸の部分にあって私たちは行きましょう。

ドゥリタラーシュトラ：——おお！ 彼は誰でしょうか。彼は私の衣服の端を引っ張っており、道を指し示しています。

ドゥールジャヤ：——父様よ、私はドゥールジャヤであります。

ドゥリタラーシュトラ：——孫であるドゥールジャヤよ！ 父様を捜しなさい。

ドゥールジャヤ：——父様よ、実に、私は極度に疲労しきっています。

ドゥリタラーシュトラ：——貴方は行きなさい。父様の膝の上で、お休みなさい。

ドゥールジャヤ：——父様よ！ 私は行きます。父様よ、貴方は何処におりますか？

王：——彼さえも来ているのだ。おお！ すべての場合にあって、心の近くにある息子への愛情は私を悩まします。何故ならば、

諸々の苦痛に気付かれておらず、私の膝の上で眠ることを常とせられた、そのドゥールジャヤは打ち倒された私を見てどのように云うでしょうか？(42)

ドゥールジャヤ：——これは地面に座られている大王様であります。

王：——息子よ、何故に、ここへやって来られたのですか？

ドゥールジャヤ：——貴方が遅延しておられるからであります。

王：——ああ、この場合においてさえ、息子への愛情は心を苦しめます。

ドゥールジャヤ：——さて、私は貴方の膝の上に、座ります。(膝によじ登る)

王：——(拒否して)ドゥールジャヤよ！ ドゥールジャヤよ！ おお、ああなんとまあ！

私の心に喜びを生じさせるものであり、私自身の目の喜びであります。その彼(ドゥールジャヤ)は、あの[新月の]月が変化から火を所有するものになります。そのように、[喜びを]生じます。(43)

ドゥールジャヤ：——膝の上に座ることを何故に貴方は阻止なされるのでしょうか？

王：——息子よ！ かつて慣れられた、楽しまれたところのものを捨ておいて、貴方によって何処か他に座りなさい。今日から貴方の、この座席はありません。(44)

ドゥールジャヤ：——何故に、何処に、大王様は行かれるのでしょうか？

王：——私の百人の兄弟のところへ行きます。

ドゥールジャヤ：——私をも貴方はそこへ連れて行ってください。

王：——行きなさい。息子よ！ このようにヴリコーダラ（ビーマ）にお告げなさいよ。

ドゥールジャヤ：——大王様よ、行きましょう！ 付いて来てくださいな。

王：——息子よ！ 何故に？

ドゥールジャヤ：——祖母様、祖父様、そして 全ての後宮の婦女に。

王：——行きなさい。息子よ！ 私は行くために相応しくありません。

ドゥールジャヤ：——私は貴方をご案内致します。

王：——息子よ！ 貴方は余りにも若すぎます。

ドゥールジャヤ：——（歩き回って）祖母様よ、これが大王様であります。

両王妃：——ああ、ああ！ 大王様であります。

ドゥリタラーシュトラ：——何処に、かの大王様がおられるのですか？

ガンダーリー：——何処に、私の息子がおられるのですか？

ドゥールジャヤ：——この大王様は地面に座られてあります。

ドゥリタラーシュトラ：——ああ、なんと、おお！ 彼が大王様であられますか？

〔供犠のための〕黄金製の柱と同等の背丈を持ち、世界中で実に唯一の統治者であります、その私の彼（ドゥリョーナ）が地面に座り、哀れな者になっています。ちょうど、扉の門の半分に等しい背丈になっています。(45)

ガンダーリー：——息子、スヨーダナよ、貴方はお疲れであります。

王：——私の尊い貴方様の、実に息子であります。

ドリタラーシュトラ：——おお！ この方は誰であられましょうか？

ガンダーリー：——大王様よ！ 私が産み出した勇敢な息子であります。

王：——今日、私は生命が生まれたかのように思います。ああ、お父様よ、今や何故に気弱と共にあられるのでしょうか？

ドゥリタラーシュトラ：——息子よ、何故に私が平然としておれ得るのでありましょうか？ そのようなことはでき得ません。

勇気と力に満ち溢れており、戦という供犠に対して身を捧げられた百人の兄弟が先に死滅されてあります。唯一人生きている貴方が殺害されたとき滅亡であります。(46)

王：——ああ、なんと、ここに尊いお方様が倒れられてあります。お父様よ、貴方はここで、尊いお方様をお慰めなさってください。

ドゥリタラーシュトラ：——息子よ、如何なる理由で、私が慰めえるのでありましょうか？

王：——私は戦闘で顔を背けることなく殺害されました、と伝えてください。ああ！ お父様！ 私の好意は、悲しみに耐えることでなされます。

貴方の足元に頭頂飾りを垂れています私は、燃えている火炎さえも考えることなしで、自尊心と共にありますが、その通りに自尊心と共に天国へ到着致します。(47)

ドゥリタラーシュトラ：——生存への願望もない、生来の閉ざされた視界（目）を持ち、老人であります私の、襲いかかられた、恐ろしい息子への悲しみは心において堅忍不拔を征服して圧倒致します。(48)

バララーマ：——おお、ああなんと！

ドゥーリョーダナへの期待（望み）を失い、永遠に閉ざされた目（視力）を持っている尊いお方の、そこにおいて、私は自分を告知することをなしえませぬ。(49)

王：——ここにおいて、私は尊い貴方様にお願い致したいのであります。

ガーンダラー：——我が子よ、云って御覧なさい。

王：——貴方に表敬の挨拶を致して、私は申し上げます。

仮に、私によって為される価値ある行為が存在するならば、それは、次ぎの世においてさえも貴方が私の母親であってくだされということでもあります。(50)

ガーンダラー：——私の心の願いは、実に、貴方によって述べられたことでもあります。

王：——マーラヴィーよ、貴方もまた、お聞きください。

私の鞆めっ面は武装解除の時に生じた、棍棒の打ち込みで打ち砕かれました。そこにおいて迸り出る、一撃の血で花輪のための余地は奪われました。黄金で作られた腕輪のような光輝を獲得されてありますこの両腕を、貴方をご覧ください。貴方の息子、夫君（主人）は戦に背を向けて破れたのではありません。ああ、戦士の妻よ、何故に、すすり泣くのでありますか？ (51)

妃（マーラヴィー）：——若い婦女であります、この合法的に結婚致しました妻であります、私はすすり泣きます。

王：——パウラヴィーよ、貴方もまた、お聞きください！

ヴェータ聖典に述べられてあり、切望された種々の供犠の祭式によって清められてあり、親族らを保持されてあり、最も深く愛する百人の兄弟の殺害者らに、相對しており、諸々の従者らは打ち負かされたのではありません。戦において、十八軍団編成の軍隊の諸王らは拘束にでくわして苦悩されてあります。ああ、誇り高い婦女よ！ このような諸々の種類の誇りを考慮して、私の妻らは実にすすり泣いてはいけません。(52)

パウラヴィー：——同じ目的を実行致します方法（投火身自殺）の確信を持っております私は泣いたり致しません。

王：——我が子ドゥールジャヤよ、貴方もまた、お聞きください。

ドゥリタラーシュトラ：——ガーンダラーよ、彼は一体何を云おうとしておるのでしょうか？

戯曲『ウールバンガ・Ūrbhaṅga (打ち砕かれた太股)』とその周辺

ガンダーリー：——私もまた、そのことを考えております。

王：——私は申し上げます。唯、パーンダヴァ (パーンドゥの五人の息子) に従うべきであります。そして、その場合、尊い貴方々の母親と同様にクーンティによって為される命令は実行されるべきであります。そしてアビマーニュの母親、ドラウパディーには、貴方々両者は母親のように尊敬されるべきであります。ご覧ください。おお、息子よ！

賞賛に値する栄光、誇りによって燃え上がられた心を所有する私の父親、ドゥーリョーダナは、戦において互角に相對して殺害されたという。貴方はそのような悲しみを捨てなさい。ユーディーシュティラの大きな亜麻布の中にある右腕に触れて後、貴方によってパーンドゥの息子らによって私の名前の最後 (最終結論) において、新鮮な (満足の) 水が与えられるべきであります。(53)

バラデーヴァ：——ああ、後悔が敵意を和らげられました。おや、言葉のようであります。

甲冑 (馬具) や太鼓の騒音から離れ、静寂であり、矢、甲冑、扇、日傘が散在されており、御者、兵士が殺害されてある時、弓を唸らせている、空に鳥の群れを興奮させている、彼は一体誰でしょうか？ (54)

(舞台の背後で)

装着された弓を所有するドゥーリョーダナによって戦の供犠式に着手せられた、その祭儀に途方もなく空しい祭官によってなされた催しものに、あたかもアーシュヴァメーダ (馬詞祭) にでもあるかのように、私は入場致します。(55)

バラデーヴァ：——ああ、なんとまあ！ これは教師 (ドゥローナ) の息子、アーシュヴァーッタマンが、ここへやって来ます。

開花されたカマラ蓮の花弁のような、はっきりした大きな両目を持ち、輝く黄金の [供犠用の] 柱のような腕を長く垂れ下げており、もの凄い弓を素早く引き絞りつつある彼は、頂上に接しているインドラの弓 (虹) を有するメール山のように火で燃え上がっています。(56)

(そのとき、アーシュヴァーッタマンが登場する)

アーシュヴァーッタマン：—— (前に語られたもの [詩頌番号55] を再び繰り返して) おお、おお！ 戦のために熱望を有する両者 (クル家とパーンドゥ家) の力において、あたかも大洋との結合の適当な時機に生じられた武器において、ナクラによって分断された形体を持ち、僅かな数の残余者らは喘ぎと共にむすばれた微弱な呼吸を有している、その諸々の王らは戦で名声を獲得いたしますように！ お聞きください、お聞きください、尊い方々らよ！

クル家の王 (ドゥーリョーダナ) は策略によって打ち砕かれた太腿を持ちましたが、私はそうではありません。御者の息子 (カルナ) は弛み衰えた武器を持ちましたが、私はそうではありません。私は今日、ここに、勝利の大地において用意された武器 (飛び道具) を所有しています。私はドゥローナの息子であり、直ちに唯一人立ち上がっています。(57)

勝利や賞賛の獲得すらない私にとって、戦の栄光によって他に何かあるのでしょうか？ (歩

き回って)そうではありません。私が[殺害された]父親の葬送の供物に専心している間に、実に、クル家系の装飾品である息子、クル王は騙されました。このことを誰が信じるでありましょうか? 何故ならば、諸々の戦車や諸々の象に乗った者らは弓を仲間とする手で上にかざされた表敬の印を持ち、その彼ら、十一軍団編成の軍隊の王らは彼(ドゥーリョーダナ)の命令を待ち望み立っていました。ビーマはパラシューラーマの弓矢によって接触せられた甲冑を着た[私の]父親と兵士らの戦においてありました。無双の戦士であるドゥーリョーダナでさえも死神(運命)によって、明らかに滅ぼされました、と。(58)

さて、ガンダーリーの息子は何処に、如何にして行かれておりますか?(歩き回って)ああ、彼は打ち碎かれて象、馬、戦車の累壁に囲まれております。クル王は戦の海を横切られております(生き延びております)。この通りであります。

冠飾りがほつれ落ち、揺れ動いている髪の毛の光輝の網を持ち、棍棒の打ち込みで碎かれ、血の湿りを伴う身体と共に最後の家への岩の平板の上に留められた彼は輝いております。あたかも、薄明かりに飛び込まれた日没の太陽のように。(59)

(近寄って行く)ああ、なんと、クル王よ! これは一体どうしたことでありましょうか?

王:——教師の息子よ! 満足を弁えない結果であります。

アーシュヴァッタマン:——なんとまあ、クル王よ! 私は尊敬の根元を放棄されかけております。

王:——貴方は何を仕出かそうとしているのでありますか?

アーシュヴァッタマン:——貴方をお聞きくださるべきであります。

戦の準備を持ち、ガルダ鳥の背に座られた身体を持ち、八の半分(四)の恐ろしい腕を持ち、掲げられたシャルンガ弓と円盤を所有しており、パードウの息子らと共にいるクリシュナを、あたかも、雑多に塗り描かれた絵画のように、私は戦において、諸々の武器の網で滅ぼします。(60)

王:——否、貴方がそのようなことを仕出かしてはいけません。

灌頂され(聖油を塗られ)である、すべての人々の統治者の一族は[母なる]大地の膝の上で死んで逝きました。また、我々はこのような状態にあります。教師の息子よ! 貴方は弓を弛めて下さいな。(61)

アーシュヴァッタマン:——おお、クル王よ!

今日、戦でパードウの息子によって、棍棒の一撃と頭髪をわし掴みされたとき、貴方の両太股と一緒に誇りさえも打ち碎かれてあります。(62)

王:——否、そのようではありません。諸々の王は誇りを体現されてあります。誇りのためにこそ、私によって敗北が受け入れられたのであります。教師の息子よ! ご覧ください。

手で掴まれた美しい巻き毛頭髪をそなえ持つドラウパディーは[嘗て]賽子賭博遊びのとき、引き擦り廻されてあります。少年であったけれども、息子アビマーニューもまた戦の前線

戯曲『ウールバンガ・Ūrbhaṅga (打ち砕かれた太股)』とその周辺

で殺害されてあります。賽子の策略によって征服されたパーンドウ兄弟らは野生の [森の] 動物らと共に、森へ避難させられたのであります。ああ、なんとまあ！ 誓願なされたことによって、私に誇りが取り戻されることをなされてありますが、そのことは実に、些細なことでもあります。(63)

アーシュヴァータマン：——全ての点において、私は約束を履行致します。

私は貴方様と同様に心によって諸々の英雄の世界を誓います。その私は、夜の戦を生じさせて、その戦でパーンドウ兄弟らを打ち滅ぼすでしょう。(64)

バラデーヴァ：——教導師の息子によって云われたことは許されるでしょう。

アーシュヴァータマン：——ここに、尊いお方様は鋤の所有者であります。

ドリタラーシュトラ：——ああ、なんと！ 実に、策略が証人の前で起っております。

アーシュヴァータマン：——ドゥールジャヤよ！ ここに、たった今 [やって来ます]。

貴方は、未だ祭官の言葉と共に灌頂を済ませておられません、父親の勇気ある行為の相続遺産であります王国が腕力で征服されたとき、王になられませよ。(65)

王：——ああなんとまあ！ 行為は私の心に賛同されたものであります。私の諸々の呼吸は捨て去ります。ここに、これらの尊い方々がおられます。シャータヌ及びその他の方々は、私の父方の先祖の方々であります。ここに、カルナを最初に位置して百人の兄弟が一緒に起き上がられてあります。アイラーヴァタの頭にしっかり留まられてあり、カーカパークシャ (両脇房髪) を付けており、マヘンドラの手掌に憩うてのち、かのアビマーニュは私に語ります。ウールヴァシーやその他の天女らは私に近寄って来るのであります。これらは壮大な大海の具現化であります。これらはカンガー河やその他の諸々の偉大な大河であります。これは私を連れて逝くためにカーラ (死神) に指図された一千羽のハンサ (白鳥) によって牽引された空中の乗り物であります。ここ、ここに私は到着致しております。

(天界へ行く)

(ヤヴァナの婦女によって敷布を広げることが行われる)

ドリタラーシュトラ：——この私は徳高い人々の沢山居住されております苦行の森へ逝きます。何故なら、息子らの死滅によって、ああ、なんと実りない王位になりました故。

アーシュヴァータマン：——それ故に、私は今日、夜襲によって殺害者のために準備されてある手を持っています。

(バラタへの願いの言葉)

敵の同盟者らを打ち滅ぼされた、我々の人々の主 (王) は大地を御加護くださいますように。(66)

(一同退場)

『打ち砕かれた太股』と名付けられたナータカ劇は完了致しました。